

茨城県行方郡麻生町

於下大峰遺跡

調査報告書

平成17年5月

麻生町教育委員会

麻生町於下大峰遺跡調査会

序 文

麻生町は霞ヶ浦と北浦の二つの大きな湖に面し、水と緑の豊かな自然に恵まれています。古代より人々が生活するうえで、恵まれた環境であった本町には、幾多の歴史が刻まれた埋蔵文化財をはじめとする貴重な文化財がたくさん残されています。

町では、これらの埋蔵文化財を保護し、後世に継承することの重要性をふまえ、その対応に努力しているところです。

麻生町於下の土砂採取場計画地内には、埋蔵文化財が所在しておりました。文化財保護の立場から協議を重ねましたが、現状維持保存が困難であることから、やむを得ず発掘調査をして記録保存することになりました。

調査にあたり、県教育庁文化課の指導のもと常総考古学研究所・藤原均氏を調査主任として、地元の方々の協力を得て調査を完了することができました。ここに関係各位のご指導、ご協力の賜と深く感謝申し上げます。

また、調査経費を負担してくださいました榎栗原工務店・栗原善一氏に対しまして、深甚なる敬意と感謝を申し上げます。

最後に、本書が幅広く活用され、貴重な文化資料となることを期待申し上げあいさついたします。

麻生町教育委員会教育長
於下大峰遺跡発掘調査会長

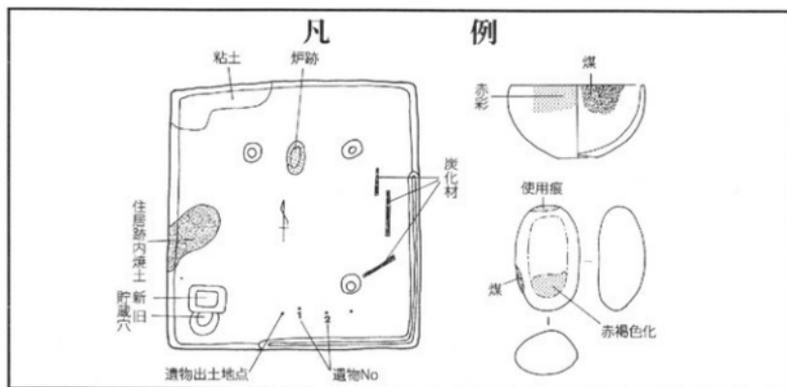
橋 本 豊 榮

例 言

- 1、本報告書は、茨城県行方郡麻生町於下字大峰に所在する「於下大峰遺跡」の調査報告書である。
- 1、当遺跡の調査は、土採取工事に先行して実施した確認調査で新発見された遺跡である。
- 1、当遺跡の確認調査は、麻生町教育委員会の指導・協力を得て平成14年5月と9月に実施した。調査は、藤原 均（日本考古学協会員、常総考古学研究所）が担当した。
- 1、当遺跡の本調査は、確認調査の結果を得て平成14年8月からと11月からの2回に分けて行ない調査会を組織して実施し、藤原が担当した。
- 1、当遺跡の整理・報告書執筆作業は、平成14年10月より断続的に17年3月迄継続した。
- 1、本報告書では、挿図表・図版日次は作成せずその都度関係図表等を示した。
- 1、本報告書での縮尺・水糸レベルは、以下に統一表示したがこれ以外はその都度示した。またスクリーンと及び遺構表記は、凡例に示した。

遺跡位置図	〜〜 1/20,000	土師器	〜〜 1/4	埴輪	〜〜 1/4
遺跡付近地形図	〜〜 1/2,000	鉄製品	〜〜 1/2	石器	〜〜 1/4
遺構全測図	〜〜 1/500	土製品	〜〜 1/2	LR	〜〜ローム粒子
遺構実測図	〜〜 1/100	石製品	〜〜 1/1	LB	〜〜ロームブロック

- 1、一覧表中の遺物の高さは、床面・底面よりの高さである。
- 1、調査会長は、平成15年9月に平山一己氏が就任し現在に至る。
- 1、出土遺物一覧表の高さは、床面及び底面よりの高低である。
- 1、復元実測遺物の写真は、最大遺存部分を主に使用した。
- 1、本報告書の編集・執筆は、藤原が行なった。
- 1、本遺跡の現地調査・報告書作成作業に関し下記の方々の協力が有ったので記して謝意を表する。
茨城県教育庁文化課、茨城県鹿行教育事務所、㈱茨城県教育財団、麻生町教育委員会
麻生町シルバー人材センター、㈱くりはら、栗原工務店、地元作業員の方々



目 次

I、遺跡の位置と環境	3	3、住居跡	6
II、調査に至る経緯と調査の経緯	3	4、溝	12
III、調査結果の概要	5	5、土坑	13
IV、遺構と遺物	5	6、出土遺物	13
1、塚	5	V、ま と め	18
2、基壇状遺構	6	VI、報告書抄録	20

於下大峰遺跡発掘調査会役員

役 職	氏 名	所 属	役 職	氏 名	所 属
会 長	橋 本 豊 榮	麻生町教育委員会 教育長	理 事	栗 原 章	(株)栗原工務店
副会長	辺 田 弘	麻生町文化財保護 審議会会長	"	根 本 博 義	麻生町教育委員会 生涯学習課長
理 事	茂 木 岩 夫	麻生町文化財保護 審議会委員	監 事	大久保 茂	(株)栗原工務店
"	高 野 悦 男	同	"	高 木 俊 博	麻生町会計課長
"	植 田 敏 雄	同審議会専門調査員	幹 事	関 川 宏	麻生町教育委員会 社会教育係長
"	藤 原 均	調査担当、 日本考古学協会員	"	高 田 和 明	麻生町教育委員会 社会教育主事

於下大峰遺跡発掘調査団

役 職	氏 名	所 属
団 長	橋 本 豊 榮	麻生町教育委員会教育長
副団長	根 本 博 義	麻生町教育委員会生涯学習課長
調査主任	藤 原 均	日本考古学協会常総考古学研究所
作業員	地 元 作 業 員 の 方 々	
事務員	関 川 宏	麻生町教育委員会生涯学習課社会教育係長
"	高 田 和 明	麻生町教育委員会生涯学習課社会教育主事



遺跡名称

- | | | |
|----------|----------|-------------|
| 1、於下大峰遺跡 | 8、国神遺跡 | 15、五疊谷貝塚 |
| 2、城口遺跡 | 9、中城南遺跡 | 16、茶白山古墳群 |
| 3、尾張塚 | 10、中宿遺跡 | 17、コシマキ山古墳群 |
| 4、稲荷塚 | 11、蔵屋敷遺跡 | 18、歌ヶ崎古墳 |
| 5、高野遺跡 | 12、代畑遺跡 | 19、圃平遺跡 |
| 6、原北遺跡 | 13、於下貝塚 | 20、古屋城跡 |
| 7、原東遺跡 | 14、羽黒平遺跡 | 21、小高城跡 |

第 1 図 遺跡位置図



第 2 圖 遺跡付近地形圖

調查區

I 遺跡の位置と環境

当「於下大峰遺跡」は、茨城県行方郡麻生町於下字大峰・堂入に所在しており、大峰地区（1区）より調査を開始したため「於下大峰遺跡」とした。麻生町は茨城県の南東部で、北西から南西に延びる行方台地の東部に所在しており、東側の北浦と西側の霞が浦とに挟まれている。

当遺跡が所在する行方台地は、霞が浦と北浦に流入する河川により台地の内陸部まで解折されており、樹枝状に複雑な舌状台地を形成している。この舌状台地は、内陸部では比較的広い台地を形成しているが、台地の先端部では馬の背状に狭い台地となっている。内陸部は標高30m代で比較的平坦な台地であるが、先端部は標高26m代で変化に富んだ地形の台地となっている。

当遺跡は麻生町の北西部で、霞が浦に突出する台地の先端部に位置しており、大峰地区（1区）は標高27m代の狭い台地で堂入地区（2区）は標高31m代を計測する同一の台地である。台地の北側には霞が浦水系の堂入谷津が北東部まで入り込んでおり、東側には広く深い谷津が入り込んでいる。

当遺跡の周辺には、縄文時代から中世までの遺跡が所在している。当遺跡と類似した遺跡としては城口遺跡が所在している。縄文時代の遺跡としては、於下貝塚・羽黒平遺跡・五霊谷貝塚等が知られている。古墳時代では、茶臼山古墳群・歌ヶ崎古墳・コシマキ山古墳群が知られており、古墳時代以降では国神遺跡・岡平遺跡等多くの遺跡が所在している。中世では小高氏の居城跡とされる小高城跡がある。これらの遺跡は、霞が浦水系の谷津に面した台地辺縁部に所在しており、台地の内陸部にかけて減少する傾向を有している。（第1図）

II 調査に至る経緯と調査の経緯

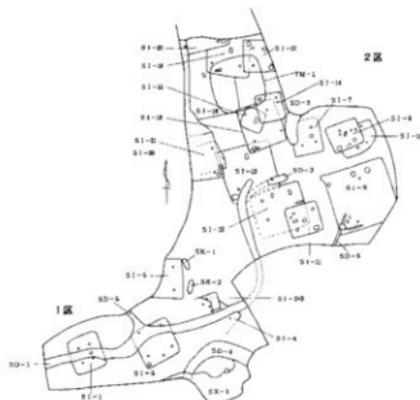
平成14年3月に㈱栗原工務店より麻生町於下字大峰844-2で、土砂採取工事計画に伴う埋蔵文化財の有無に関する照会が麻生町教育委員会に提出された。これを受けて教育委員会は、常総考古学研究所藤原均氏の協力を得て5月に現地踏査を実施し土師器片の散布を確認したために、確認調査が必要であることを㈱栗原工務店に通知した。こののち教育委員会は、藤原氏と㈱栗原工務店の協力を得て5月に確認調査を実施し、住居跡3軒と溝1条を発見した。これにより当地は、新発見の遺跡となり「於下大峰遺跡」として麻生町遺跡台帳に記載すると同時に、県文化課及び㈱栗原工務店に報告した。この後教育委員会は、㈱栗原工務店と遺跡の現状保存に関し協議を行なったが、現状保存が困難との結論に至り発掘調査を実施して記録保存することとした。発掘調査は、於下大峰遺跡調査会を組織して行なう事とし調査を藤原氏に依頼した。現地調査は、平成14年8月5日より開始する事とした。現地調査は9月11日に終了した。この調査が、第1次調査となった。

第1次調査は、8月5日より開始した。表土除去後精査を行い住居跡6軒・溝2条・土坑2基・基壇状遺構1基を確認した。調査は住居跡より開始し、22日に終了した。住居跡の調査終了後溝の調査を実施し、25日に終了した。この後基壇状遺構の調査を開始したが、硬い土層のために9月7日に終了した。この後土坑の調査・全測・全景写真撮影を行い、11日に終了した。

平成14年8月に㈱くりはらより麻生町於下字堂入り825-1で、土砂採取工事計画に伴う埋蔵文化財の有無に関する照会が麻生町教育委員会に提出された。これを受けて教育委員会は、常総考古学研究所藤原均氏の協力を得て9月に現地踏査を実施した。この結果、塚1基を確認したが土器片の散布は認

第1表 遺構一覧表

名称	形状	規模(m)			方位	跡(m)			貯蔵穴	柱数	備考	
		東西	南北	深さ		長さ	幅	深さ				
第1号壕(TM-1)	方形	5.40	6.00		N-12°-W						高さ2.0m、貯蔵の塚と推定	
基壇状遺構(SX-1)	正方形	6.00	9.00		N-36°-W						近位か	
第1号住居跡(SI-1)	隅丸長方形	4.60	5.50	0.56	東西	N-70°-E				4	北東を向き砂層内に掘り込む。1礎と重複	
第2号住居跡(SI-2)	長方形	2.30	3.00	0.45	南北	N-40°-E				1	斜溝部でSI-2-4と重複、西壁消失、茶褐色砂層内に所在	
第3号住居跡(SI-3)	方形	1.70	1.75	0.50	南北	N-42°-E				1	斜溝部でSI-2-4と重複、西壁消失、茶褐色砂層内に所在	
第4号住居跡(SI-4)	隅丸方形	5.50	2.00	0.20	南北	N-20°-E				2	斜溝部でSI-2-3及びSI-1と重複、南壁消失、砂層内	
第5号住居跡(SI-5)	隅丸方形	4.00	5.90	0.50	南北	N-10°-E					斜溝部でSI-1と重複、西壁消失、茶褐色砂層内に所在	
第6号住居跡(SI-6)	長方形	5.75	6.20	0.38	南北	N-27°-W				南西面	中央部でSD-1と重複、か跡消失	
第7号住居跡(SI-7)	隅丸長方形	4.53	6.00	0.10	南北	N-13°-W				2	SD-2と重複、北壁消失、火災伝存	
第8号住居跡(SI-8)	正方形	4.60	4.50	0.23	東西	N-60°-E	0.25	0.18	0.03	南東面	SI-10と重複、粘土層内に所在	
第9号住居跡(SI-9)	不整形長方形	7.70	7.00	0.12	南北	N-35°-W	0.45	0.38	0.03	南西面	SD-6と重複、伊勢に新田あり、粘土層内	
第10号住居跡(SI-10)	不整形形状	5.20	4.90	0.35	東西	N-30°-W	0.50	0.48	0.07	7	SI-8と重複、粘土層内	
第11号住居跡(SI-11)	正方形	4.95	4.64	0.20	東西	N-70°-W	0.62	0.35	0.05	南東面	SI-6と重複、貯蔵穴に新田を有す	
第12号住居跡(SI-12)	正方形	7.00	7.20	0.09	南北	N-23°-W	0.60	0.50		南東面	SD-3、SI-11と重複、間仕切り壁、地床伊	
第13号住居跡(SI-13)	長方形	7.65	8.20	0.40	南北	N-18°-W	0.85	0.48		南西面	SD-1-2及びSI-15と重複、地床伊	
第14号住居跡(SI-14)	正方形	3.90	4.00	0.18	南北	N-10°-E	0.18	0.15		北西面	SI-15-16と重複、地床伊	
第15号住居跡(SI-15)	正方形	4.25	4.45	0.30	東西	N-16°-W				南西面	SD-1及びSI-13-14と重複、貯蔵穴に新田を有す	
第16号住居跡(SI-16)	正方形	4.10	4.00	0.11	東西	N-6°-W	1.10	0.50	0.05			SI-14-15と重複、南北方向に方位を有す、小塚穴
第17号住居跡(SI-17)	隅丸長方形	5.10	5.65	0.10	南北	N-6°-E	0.52	0.35	0.03	南西面	SI-19と重複、東壁消失、貯蔵穴に新田を有す、地床伊	
第18号住居跡(SI-18)	長方形	8.00	7.00	0.35	南北	N-16°-W	0.91	0.45	0.04	1	SI-16-19と重複、西壁消失、弥生時代後期	
第19号住居跡(SI-19)	不整形形状	5.70	6.10	0.12	南北	N-0°-E	6.50	0.33	0.03	5	SI-17-18-22と重複、伊勢に新田あり、土器区域外	
第20号住居跡(SI-20)	不整形形状	5.70	5.30	0.31	東西	N-18°-S				南東面	SI-13-21と重複、西壁消失、西向き	
第21号住居跡(SI-21)	不整形形状	3.80	5.50	0.15	南北	N-10°-W				南東面	SI-13-20と重複、西壁消失	
第22号住居跡(SI-22)	隅丸方形	7.00	2.30	0.23	南北	N-17°-W				南東面	SI-19と重複、西壁消失、南壁部分の調査	
第1号土坑(SK-1)	長方形	0.90	1.90	0.60		N-15°-W					SI-5と重複、壁が一部オーバーハンクしている	
第2号土坑(SK-2)	長方形	1.15	2.40	0.23		N-22°-E					斜溝部に位置、壁が一部オーバーハンクしている	
第1号溝(SD-1)		68.0	1.20	0.30							1区南東部より2区北東部までの溝、SD-2と同一と推定	
第2号溝(SD-2)											2区北東部で、SD-1と同一と推定	
第3号溝(SD-3)		3.50	1.20	0.45							2区中央部で、2区SD-2と同一か	
第4号溝(SD-4)		5.50	1.25	0.35							1区南東部で、SK-1に隣接する溝と推定	
第5号溝(SD-5)		3.20	0.70	0.35							1区中央部で、SD-1に隣接	
第6号溝(SD-6)		5.20	0.28	0.35							SI-9と重複、時期不明	



第3図 遺構全測図

められなかった。このため前回の結果と合わせ、確認調査が必要であることを回答した。確認調査は俣くりはらと藤原 均氏の協力を得て9月に実施した。この結果住居跡6軒と溝1条が発見され、前回と同時期であることから同一遺跡であるとの結論に至り、本調査が必要であることを回答した。また前回と同様に、新発見の遺跡で同一遺跡であることを県文化課に報告した。調査は前回の調査会を適用し、同年11月14日より開始した。

表土除去前に塚の封土実測を実施し、16日より表土除去と塚の調査を開始した。表土除去は18日に塚と塚の北側を除き終了し、精査の結果住居跡12軒・溝3条を確認した。塚の調査終了後に、塚北側と西側の一部表土を除去し、4軒の住居跡を確認したことで住居跡は16軒となった。この後住居跡の調査を開始し、15年1月17日に終了した。住居跡の調査終了後溝の調査を実施し、1月19日に終了した。この後遺構全測・遺構全景撮影等の作業を行い、1月21日に現地調査を終了した。

整理・報告書作成作業は、平成14年9月より17年3月まで断続的に継続した。

III 調査結果の概要

於下大峰遺跡の調査結果は、第3図と第1表に示したように塚1基・溝7条・土坑2基・住居跡22軒基壇状遺構1基を確認し調査した。1次を1区とし、2次を2区として記述する。

1区では、基壇状遺構1基・溝3状・住居跡6軒・土坑2基が調査されているが、平端部と斜面部とに分けられる。平端部には住居跡2軒(SI-1・6)と、基壇状遺構1基(SX-1)と溝1状(SD-4)が所在し、斜面部には住居跡4軒(SI-2~5)と土坑2基(SK-1・2)が所在している。溝1(SD-1)は、1区の北東部から南西端部まで掘り込まれており、溝2(SD-5)は中央部より北西方向に掘り込まれている。

2区では塚(TM-1)が中央北側に所在しており、住居跡(SI-6~22)は2区のほぼ全域に所在しているが、著しい重複状況を呈し中央部に集中する傾向を有している。溝(SD-1~3・6)としては、中央部から北東部と南東部に掘り込まれている。2区での住居跡は、大型の住居跡と小型の住居跡とがあり、小型の住居跡が大型の住居跡を掘り切っているため、時期的な差異を示している。

出土遺物としては、土師器甕・高環・椀・土製品・石製品等が住居跡内より出土しており、塚の封土からは土師器甕・高環・椀・円筒埴輪片・雲母片岩片等が出土している。基壇状遺構の封土からは、土師器甕・高環椀・鉄製品等が出土している。これらの出土遺物は、古墳時代中期(和泉期)の遺物が中心である。

IV 遺構と遺物

1、塚(TM-1、第5・16図、第4表、図版I・II・VI)

塚は2区の北側中央で、中央部より北方に突出した馬背状の部分に位置しており、正方形状を呈する塚である。周溝は認められず、封土上にも石塔等は何ら認められなかった。北西方向に方位を有する塚で、7.20×7.65mを計測し南北方向がやや長いようであり、高さは1.70mを計測する。封土は黒褐色土(23層)上に黒色土・暗褐色土・黒褐色土・茶褐色土・黄褐色土・明褐色土・粘土層等を用いて盛土しており、各土層は比較的締まっているが粘性の無い土層である。南北方向では同一平面的に盛土し

ているが、東西方向では西側が斜面のため傾斜しながら盛土している。また西側の4層内から雲母片岩片が出土しているが、埋葬施設・埋葬品は出土しなかった。

出土遺物としては、土師器甕・高環・椀・雲母片岩等の破片と円筒埴輪・弥生式土器片が出土しているが、時期決定可能な遺物は出土しなかった。具体的な時期を欠くが、近世江戸期の塚と推定される。

2、基壇状遺構（S X-1、第4・16図、第1表、図版Ⅲ・Ⅵ）

この基壇状遺構は、1区南東部でやや突出した部分に所在している。第4号溝（S D-4）で北側斜面とを区切り、2段のテラスを削り出し底面としている。上段のテラスは8.00×1.00×0.50mを計測し軟質な茶褐色砂層内に掘り込まれているが、壁はほぼ垂直に掘り込まれており底面は平坦である。下段のテラスは6.00×2.50×0.90（上段より0.30）mを計測し、長方形を呈している。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、底面は硬質な茶褐色砂層面で南側にかけて緩やかに下降している。また西側には逆L字状に溝が一条掘り込まれている。4号溝と上段のテラス間は三角形（6.40×3.20m）で軟質な砂層面が遺存している。この砂層面は、自然層である。

土層は砂質の硬い土層で、暗白色砂・暗茶褐色砂・明黒褐色土・暗褐色砂・黒褐色土等が北方より堆積しており、人為的に盛土された状況を呈している。

出土遺物としては、土師器甕・高環・椀・刀子等が出土しているが、土師器は全て小破片で著しく摩滅しており、刀子は刀部の小破片である。

3、住居跡

第1号住居跡（S I-1、第5・17図、第2表、図版Ⅲ・Ⅵ）

本跡は1区西側で、第1号溝（S D-1）と重複しており、砂層内に掘り込まれている。南北方向に長軸を有しており、竈跡の位置から東側を向く住居跡である。壁はほぼ垂直に掘り込まれているが、壁溝は認められなかった。床面はやや硬い茶褐色砂層面で、炉跡は楕円形で中央東側に所在している。柱穴は4本認められたが、貯蔵穴は認められなかった。

土層は暗褐色土・黒褐色土が覆土として堆積しているが、砂質でやや硬い土層である。また覆土上層には、黄褐色土が本跡埋没後に堆積している。11・12層は自然層であり、1～6層はS D-1の覆土である。

出土遺物としては、覆土内より土師器甕・高環・椀等が破片で出土しており、床面及び床面付近からは土師器甕・高環・椀等が出土している。出土遺物で図示出来たのは、高環（1・2）の2点である。

第2号住居跡（S I-2、第6・15図、第2表、図版Ⅲ・Ⅵ）

本跡は1区東側斜面部で、第3・4号住居跡（S I-3・4）と重複している。硬質な茶褐色砂層内に掘り込まれており、南北方向に長軸と方位を有し長方形を呈している。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、壁溝は確認面で全周している。床面は直床状で、炉跡と貯蔵穴は認められず柱穴は2本認められたのみである。また南側には、間仕切り溝が認められた。

土層は黒色土・黒褐色土・明褐色土が北方より堆積しており、粘土質で砂粒子を含む硬質な土層である。また覆土上層には暗褐色土・黒褐色土が堆積しており、堆積状況は自然堆積である。

出土遺物としては、覆土内より土師器甕・高環・椀等の小破片が少量出土しており、床面及び床面付近からは石製模造品が出土している。これらの出土遺物で図示出来たのは、石製模造品（3）1点のみ

である。

第3号住居跡（S I - 3、第6図、図版Ⅲ）

本跡は1区東側斜面部で、S I - 1・4及びSD - 1と重複している。硬質な茶褐色砂層に掘り込まれており、長軸を南北方向に有し北東方向を向く長方形を呈している。壁はほぼ垂直に掘り込まれているが、南壁と東壁は消失し床面は直床状を呈している。壁溝・炉跡・貯蔵穴は認められず、柱穴は1本認められたのみである。また南東部は、伐根により破壊されている。

土層は黒色土が堆積しているが、粘土粒子と砂粒子の量と硬さから2層に細分され、堆積状況は自然堆積である。

出土遺物としては、覆土内より土師器甕・高環・椀の小破片が少量出土しており、床面及び床面付近からは皆無で図示不能である。

第4号住居跡（S I - 4、第6図、図版Ⅲ）

本跡は1区東側斜面部の南東部で、S I - 2・3及びSD - 1と重複している。硬質な茶褐色砂層とやや軟質な明褐色砂層内に掘り込まれており、南北方向に長軸と方位を有している。壁はほぼ垂直に掘り込まれているが、南壁と遺構の南側は斜面の為に消失している。壁溝は確認面で全周しているが、北壁の南側に壁溝が掘り込まれていることから、北側に拡張された住居跡である。床面は直床状で、炉跡・貯蔵穴は認められず柱穴は2本認められたのみである。柱穴の位置から本跡は、一辺5m代の住居跡と判断される。

土層は黒色土と黒褐色土が自然堆積状に堆積しているが、粘土質の硬い土層である。また出土遺物としては、土師器甕・高環・椀等の小破片が少量出土しているが、図示不能である。

第5号住居跡（S I - 5、第6図、図版Ⅲ）

本跡は1区東側斜面部で、第1号土坑（SK - 1）と重複している。斜面部に掘り込まれているため北・南壁は消失し西壁は間壁により削平されている。壁はほぼ垂直に掘り込まれているが、壁溝と炉跡及び貯蔵穴は認められず、柱穴は2本認められたのみである。遺構の状況から本跡は、南北方向に長軸と方位を有する住居跡と判断される。

土層は黒色土・暗褐色土・黒褐色土・白色砂・茶褐色砂が自然堆積状に堆積しており、砂粒子と粘土粒子を含みやや硬い土層である。

出土遺物としては、覆土内から土師器甕・高環・椀等の小破片が出土しており、床面と床面付近は土師器甕・高環・椀等が破片で出土した程度で、図示可能な遺物は出土しなかった。

第6号住居跡（S I - 6、第7図、図版Ⅲ）

本跡は1区中央部で、SD - 1と重複している。砂層と粘土層内に掘り込まれており、南北方向に長軸と方位を有している。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、壁溝と炉跡は認められなかった。床面は直床状で、柱穴は5本認められた。貯蔵穴は南西部に所在し、隅丸長方形（0.70 × 0.62 × 0.60 m）を呈している。

土層は暗褐色土・黒褐色土・黄白色砂・黄褐色土・焼土が堆積しており、砂質や粘土質の土層でやや硬い土層である。堆積状況は、自然堆積である。

出土遺物としては、覆土内より紡錘車・土師器甕・高環・椀等が破片で出土しており、床面と床面付近及び貯蔵穴内からは土師器甕・高環・椀・石等が出土している。これらの出土遺物で図示出来たのは

土師器埴(4)・高坏(6)・椀(5)・紡錘車(7)・石(8・9)の6点である。

第7号住居跡(SI-7、第8図、図版IV)

本跡は2区北東部で、第2号溝(SD-2)及び第14・15号住居跡(SI-14・15)と重複している。ローム層内に掘り込まれており、南北方向に長軸と方位を有している。壁はほぼ垂直に掘り込まれているが、北壁は斜面の為に消失している。壁溝は認められず、床面はやや軟弱な貼床であるが火災により一部赤褐色化している。炉跡は中央部に所在し、円形状を呈し良く焼けている。柱穴は2本認められたのみで、貯蔵穴は認められなかった。また床面には焼土が4ヶ所に堆積し、下位の床面も焼けており炭化材片が9片出土している。

土層は黒色土・黒褐色土・暗褐色土・焼土が堆積しており、各層とも焼土や焼土粒子を含んでいる。やや軟質な土層であり、自然堆積の状況を呈しているが、廃棄後まもなくの火災住居である。

出土遺物としては、覆土内より土師器甕・高坏・椀等の小破片が少量出土しており、床面からは土師器高坏破片で出土しているが図示不能である。

第8号住居跡(SI-8、第7図、図版IV)

本跡は2区中央東側で、第10号住居跡(SI-10)と重複している。ローム層と粘土層内に掘り込まれており、東西方向に長軸を有し南北方向を向いている。壁はほぼ垂直に掘り込まれているが、壁溝は認められなかった。床面はやや軟質な貼床で、炉跡は北西部に所在し良く焼けている。柱穴は4本認められており、貯蔵穴は南西部に所在し長方形(0.66×0.48×0.20m)を呈している。

土層は黒色土・黒褐色土・暗褐色土・粘土・明褐色土等が堆積しており、粘土層は北壁と西壁北側に厚く堆積している。自然堆積と見るよりは、人為堆積と判断される。

出土遺物としては、覆土内より土師器甕・高坏・椀等が破片で出土したのみで、図示可能な遺物は出土しなかった。

第9号住居跡(SI-9、第8・15図、第2表、図版IV・VI)

本跡は2区南東部で、第6号溝(SD-6)と重複している。ローム層と粘土層内に掘り込まれており東西方向に長軸を有し北方に方位を有している。壁は斜めに掘り込まれており、壁溝は部分的に認められたが、一部はオーバーハンクしている。床面は直床状を呈しており、炉跡は北東部に所在し楕円形状で良く焼けている。柱穴は8本認められており、貯蔵穴は南西部に所在し新旧を有するため不整形(1.10×1.00×0.50m)を呈している。また南壁付近には、攪乱溝がある。

土層は黒褐色土・黒色土・暗褐色土・明褐色土・焼土が堆積しており、ローム粒子・粘土粒子や焼土粒子等を含みやや硬質な土層である。焼土は、本跡廃棄後の流入である。

出土遺物としては、覆土内より土師器甕・高坏・椀等が破片で出土しており、床面と床面付近及び貯蔵穴内より土師器甕・高坏・椀等が出土している。これらの出土遺物で図示出来たのは、土師器器台(10)・坏(12)・椀(11)の3点である。

第10号住居跡(SI-10、第7図、図版IV)

本跡は2区中央東側で、SI-8と重複している。粘土層内に掘り込まれており、東西方向に長軸を有し南北方向に方位を有している。壁は斜めに掘り込まれており、壁溝は認められなかった。床面は直床状で、炉跡は中央やや北側に所在し円形状で良く焼けている。柱穴は5本認められたが、貯蔵穴は認められなかった。

土層は黒色土・黒褐色土・暗褐色土が堆積しており、粘土質でやや硬質な土層である。出土遺物とし

ては、覆土内より土師器甕・高環の小破片が少量出土した程度で、図示可能な遺物は出土しなかった。また南西部の攪乱(K)は、木根である。

第11号住居跡(SI-11、第9・12図、第2表、図版IV・VI)

本跡は2区中央南側で、第12号住居跡(SI-12)と重複している。ローム層内に掘り込まれており、東西方向に長軸と方位を有している。壁はほぼ垂直に掘り込まれているが、南壁は斜面部のために消失している。壁溝は確認面で西壁の南側を除き全周し、床面は全体的に軟弱な貼床である。炉跡は中央西側に所在し、楕円形状で良く焼けている。貯蔵穴は南東部に所在し、長方形(1.10×0.80×1.20m)で4回造り変えられており、東側の円形を呈する部分が新しい貯蔵穴である。柱穴は、4本認められている。

土層は暗褐色土・黒褐色土・明褐色土が堆積しており、粘土質で硬質な土層である。第10～12層は焼土粒子と焼土ブロックを含んでいる。堆積状況は、自然堆積である。

出土遺物としては、覆土内より土師器甕・高環・椀・埴等が破片で出土しており、床面と床面付近及び貯蔵穴内からは土師器甕・高環・椀等が出土している。これらの出土遺物で図示出来たのは、土師器甕(13)・高環(16)・椀(14・15・18)・埴(17)の6点である。

第12号住居跡(SI-12、第9・15図、第2表、図版IV・VI)

本跡は2区中央南側で、SI-11・13及びSD-1・2と重複している。南北方向に長軸と方位を有しローム層内に掘り込まれおり、壁はほぼ垂直に掘り込まれているが北壁中央部西側・西壁・南壁・東壁中央南側は消失している。壁溝は認められず、床面は全体的にやや硬い貼床である。炉跡は中央北側に所在し、楕円形状で良く焼けている。貯蔵穴は南東部で不整形(0.65×0.65×0.42m)を呈しており、柱穴は4本認められた。

土層は黒褐色土・暗褐色土・明褐色土が堆積しており、粘土質の硬質な土層で少量の炭化物粒子を含んでいる。堆積状況は、自然堆積である。

出土遺物としては、覆土内より土師器甕・高環・椀等の小破片が出土しており、床面及び床面付近からは土師器・甕・紡錘車が出土している。これらの出土遺物で図示出来たのは、土師器甕(20)・紡錘車(19)の2点である。

第13号住居跡(SI-13、第10・15図、第2・3表、図版IV・VI)

本跡は2区中央部で、第12・15・20・21号住居跡(SI-12・15・20・21)及びSD-1・2と重複しており、南北方向に長軸と方位を有し、ローム層内に掘り込まれている。壁はほぼ垂直に掘り込まれているが、壁溝は認められなかった。床面はやや硬い直床状態で、炉跡は中央北東部に所在し楕円形状を呈し良く焼けている。柱穴は3本認められたのみであり、貯蔵穴は南西部で新旧を有し長方形(1.15×0.88×0.40m)を呈している。また炉跡の北側には、流入による焼土が堆積している。

土層は遺構内覆土として、黄褐色土・黒色土・黒褐色土・明褐色土が堆積しており、粘土質でやや硬い土層である。また覆土上面には、黒色土と暗褐色土が堆積している。この2層は、遺跡覆土であり塚の土層と接続している。

出土遺物としては、土師器甕・高環・椀等が覆土内より破片で出土し、床面と床面付近及び貯蔵穴内からは土師器甕・高環・椀等が出土している。これらの出土遺物で図示出来たのは、土師器甕(22)・高環(21・23～25)の5点である。

第14号住居跡（S I - 14、第11・15図、第3表、図版IV・VI）

本跡は2区中央北東部で、S I - 15及び第16号住居跡（S I - 16）と重複している。ローム層と粘土層内に掘り込まれており、南北方向に長軸を有し東西方向を向いている。壁はほぼ垂直に掘り込まれているが、壁溝は認められなかった。床面は粘土層で全体的にやや硬い貼床であり、柱穴は北東部で1本認められたのみである。炉跡は中央東側に所在し、楕円形状の小さな炉跡であるが良く焼けている。貯蔵穴は北西部に所在し、長方形（0.65 × 0.44 × 0.45 m）を呈している。

土層は黒色土・黒褐色土・暗褐色土・明褐色土・黄褐色土・赤褐色土・炭化物が堆積しており、粘土粒子・粘土ブロック・焼土・焼土粒子・炭化物等を含み、粘土質のやや硬い土層である。床面上には炭化材が第11層と共に堆積しているが、下位の床面は焼けていない。堆積状況は、自然堆積である。

出土遺物としては、覆土内より土師器甕・高環・椀等が破片で出土しており、床面と床面付近及び貯蔵穴内より鎌・土師器甕・高環・椀等が出土している。これらの出土遺物で図示出来たのは、鎌（26）・土師器甕（27・29・30）・椀（28）の5点である。

床面上より炭化材が出土しているが、焼土の堆積が無く床面も焼けていないことから、本跡は廃棄後まもなくしての火災住居跡と判断される。

第15号住居跡（S I - 15、第10・15図、第3表、図版IV・VI）

本跡は2区中央北側で、S I - 13・14・16及びS D - 2と重複しておりローム層内に掘り込まれている。東西方向に長軸を有し、南北方向に方位を有している。壁はほぼ垂直に掘り込まれているが、壁溝は認められなかった。床面は全体的に堅緻な貼床で、炉跡は消失しているが柱穴は3本認められた。貯蔵穴は南西部に所在し、円形状（0.58 × 0.48 × 0.68 m）で中央が新貯蔵穴である。

土層は黄褐色土・黒色土・明褐色土・黒褐色土・暗褐色土が堆積しており、粘土質でやや硬い土層である。堆積状況は、自然堆積後の人為堆積と判断される。

出土遺物としては、覆土内より土師器甕・高環・椀等が破片で出土しており、床面及び床面付近からは土師器高環・椀等が出土している。また貯蔵穴内からは、土師器甕・高環・椀等が破片で出土している。これらの出土遺物で図示出来たのは、土師器甕（31・32）の2点である。

第16号住居跡（S I - 16、第11図、図版IV）

本跡は2区中央北側で、S I - 14と16と重複しS I - 16の覆土内に掘り込まれている。東西方向に長軸を有し、南北方向に方位を有している。壁は斜めに掘り込まれており、壁溝・柱穴・貯蔵穴等は認められなかった。炉跡は中央南側に所在しており、楕円形状で良く焼けている。また炉跡の周囲には、長方形の浅い掘り込み（2.35 × 1.26 × 0.08 m）を有している。床面は、全体的に軟質な貼床である。

土層は黄褐色土が堆積しており、2層に細分されるが粘土質の土層でやや硬質である。堆積状況は人為堆積と判断される。また第6層の上面各層は、T M - 1と遺跡覆土である。

出土遺物としては、覆土内より土師器甕・高環の小破片が少量出土した程度で、図示可能及び時期決定可能な遺物は出土しなかった。

第17号住居跡（S I - 17、第11・16図、第3表、図版V・VI）

本跡は2区中央北東部で、第19号住居跡（S I - 19）と重複しT M - 1の下位に所在し、南北方向に長軸と方位を有している。壁はほぼ垂直に掘り込まれているが、東壁は斜面の為に消失している。壁溝は全周しているが、北壁の部分を除き二重周溝状を呈するため拡張された住居跡と判断される。床面

は粘土層内で全体的に堅緻な貼床であり、炉跡は楕円形状で北東部に所在し良く焼けている。柱穴は3本認められ、貯蔵穴は北西部と南東部に所在するが、前者が旧で後者が新である。前者は方形状(0.66×0.66×0.50 m)を呈し、粘土で埋めており、後者は楕円形状(0.75×0.55×0.66 m)を呈するが東壁は消失している。

土層は遺構内覆土として黒褐色土が堆積しており、細分すると5層に分類される。床面上の黒褐色土(8層)には、多量の炭化材・炭化物粒子を含んでいるが、下位の床面は焼けていない。また第6層の黒褐色土は、粘土ブロック・ロームブロック等を含み硬く締まりの無い土層である。堆積状況は自然堆積後まもなくして人為堆積と判断される。

出土遺物としては、覆土内より土師器甕・高坏・椀・埴等が破片で出土しており、床面及び床面付近からは土師器甕・高坏・椀・砥石等が出土している。これらの出土遺物で図示出来たのは、土師器甕(33)・椀(34)・埴(35)・磨石(36～38)の6点である。

第18号住居跡(SI-18、第12・16図、第3表、図版V・VI)

本跡は2区中央北西部で、第19号住居跡(SI-19)と重複しており、南北方向に長軸と方位を有している。壁はほぼ垂直に掘り込まれているが、北壁と西壁は斜面のため消失している。床面はやや軟質な直床状で、炉跡は北西部に所在し楕円形状で良くやけている。柱穴は北東部で1本(P-1)認められたが、建て替えが認められた柱穴である。

土層は黒褐色土・黒色土が堆積しており、粘土質でやや硬い土層である。出土遺物としては、覆土上面より土師器甕・高坏の小破片が少量出土しており、床面からは土師器埴・高坏片等が出土している。これらの出土遺物で図示出来たのは、土師器埴(40)1点である。

第19号住居跡(SI-19、第12図、図版V)

本跡は2区中央北側で、SI-17・18及び第22号住居跡(SI-22)と重複しており、南北方向に長軸と方位を有している。壁はほぼ垂直に掘り込まれているが、東壁は消失し北壁は調査区域外に所在している。壁溝は認められず床面は直床状で、炉跡は中央部に所在し楕円形状で良く焼けている。柱穴は、3本認められている。また北東部には木根の攪乱を受けている。

土層は黒色土・黒褐色土・暗褐色土が堆積しており、粘土質でやや硬い土層であるがTM-1の下位に所在することから、覆土の南側は締まった土層となっている。自然堆積である。

出土遺物としては、覆土内より土師器甕・高坏等の小破片が少量出土しているが、図示可能な遺物は出土しなかった。

第20号住居跡(SI-20、第13図、図版V)

本跡は2区中央西側で、第21号住居跡及びSI-13と重複しており、東西方向に長軸と方位を有する住居跡と推定される。壁はほぼ垂直に掘り込まれているが、北壁と南壁は斜面のため消失しており床面と炉跡も消失しているが、遺存部分の床面は直床状で、壁溝は認められなかった。貯蔵穴は南東部に所在し、長方形状(0.80×0.70×0.75 m)を呈している。

土層は黒色土・黒褐色土・暗褐色土が、東側より流入した状況で堆積しており、粘土質でやや硬い土層である。

出土遺物としては、覆土内より土師器甕・高坏・椀等が破片で出土しているが、床面と床面付近からは皆無で貯蔵穴内より土師器高坏片が出土したのみである。

第21号住居跡（S I - 21、第13・16図、第3表、図版V・VI）

本跡は2区中央西側で、S I - 13・20と重複し南北方向に長軸と方位を有している。壁はほぼ垂直に掘り込まれているが、南壁と東壁の一部以外消失している。壁溝は東壁と南壁の一部で認められのみであり、床面は粘土層でやや硬い貼床である。炉跡は認められず、柱穴は2本認められたのみである。貯蔵穴は南東部に所在し、隅丸長方形（0.62 × 0.55 × 0.58 m）を呈している。

土層は黒色土・黒褐色土・暗褐色土・白色粘土が、東側より流入した状態で堆積し粘土質のやや硬い土層である。

出土遺物としては、土師器甕・高環・椀等の破片が覆土内と貯蔵穴内より出土しているが、床面及び床面付近からは土師器高環（41）が1点出土したのみである。

第22号住居跡（S I - 22、第12・16図、第3・4表、図版V・VI）

本跡は2区北側で、S I - 19と重複しローム層内に掘り込まれているが、遺構の大部分は北側調査区域外に所在している。壁はほぼ垂直に掘り込まれているが、南壁と東壁南端部を確認したのみで西壁は斜面のため消失しており、壁溝は確認面ではほぼ全周している。床面は軟弱な貼床であり、柱穴は2本認められた。貯蔵穴は南東部で、長方形（1.05 × 0.50 × 0.45 m）を呈している。

土層は表土層以下黒色土・黒褐色土・暗褐色土・暗白色粘土が堆積しており、粘土質のやや硬い土層である。堆積状況は、自然堆積である。

出土遺物としては、覆土内より土師器甕・高環・椀等の破片が出土しており、床面と床面付近及び貯蔵穴内よりは土師器甕・高環・椀等が出土している。これらの出土遺物で図示出来たのは、土師器高環（42・43）の2点である。

4、溝（第 図、図版）

第1・2号溝（SD-1・2、第8・13図、図版V）

本跡は1区南西端部から2区北東部にかけて掘り込まれており、一部途切れているため別々の遺構のように見えるが、本来は同一の溝と判断される。1溝（SD-1）は、1区南西斜面下より1区中央部を通り東側斜面部に掘り込まれた後に、2区南側斜面を通り2区南西部まで掘り込まれている。2区中央部では認められなかったが、2区中央部から北東斜面部まで掘り込まれている。この間1区ではS I - 1・3・4・6・7・13を掘り切っている。全長68.0 m・幅1.20～1.70 m・深さ0.30～0.45 mを計測し、底面は皿状で壁は斜めに掘り込まれている。

土層は黒色土・黒褐色土・暗褐色土・茶褐色砂・白色砂等が堆積しており、粘土質のやや硬い土層である。堆積状況は、自然堆積である。

出土遺物としては、覆土内より土師器甕・高環・椀等が小破片で出土しているが、時期を決定可能及び図示可能な遺物は出土しなかった。

第3号溝（SD-3、第9図、図版IV）

本跡は2区中央部で、西側から中央部まで掘り込まれており、S I - 13を掘り切っている。西側では、SD-1に西側端部を切られている。SD-1の旧溝のようであるが、別の溝として報告する。全長3.50 m・幅1.20 m・深さ0.45 mを計測するが、SD-1と接続していたと推定すると全長6.50 m程度となる。底面は皿状で、壁は斜めに掘り込まれている。

土層は暗褐色土と黒色土が溝内に堆積しており、覆土上面には茶褐色砂が堆積している。砂質のやや

硬い土層であり、人為堆積のようである。

出土遺物としては、土師器甕・高環の小破片が少量出土した程度で、図示可能な遺物や時期決定可能な遺物は出土しなかった。

第4号溝 (SD-4、第4図、図版Ⅲ)

本跡は1区南東部で、基壇状遺構(SX-1)の北側に所在している。やや軟質な砂層内に、半円形状に掘り込まれている。底面は平坦で壁は斜めに掘り込まれており、幅は1.25～2.15m・深さ0.40mを計測する。SX-1に関連する溝と推定される。

土層は黒色土・暗褐色土・茶褐色土・白色砂が堆積しており、砂質の軟らかい土層である。出土遺物としては、土師器甕・高環の小破片が少量出土した程度である。

第5号溝 (SD-5、第7図)

本跡は1区中央部で、SD-1中央部から北側に掘り込まれた溝であるが、北側端部は削平され消失している。全長3.20m・幅0.70m・深さ0.35mを計測し、粘土層内に掘り込まれている。底面は皿状を呈し、壁は斜めに掘り込まれている。

土層は黒色土・黒褐色土・茶褐色土が堆積しているが、粘土質の硬い土層である。堆積状況は、自然堆積である。

出土遺物としては、覆土内より土師器甕・高環の小破片が少量出土したのみで、図示可能な遺物や時期決定可能な遺物は認められなかった。

第6号溝 (SD-6、第8図、図版Ⅲ)

本跡は2区中央南側で、SI-9を掘り切つて南側斜面斜面部まで掘り込まれている。確認面での規模は全長5.20m・幅0.28m・深さ0.35mを計測し、直線的に掘り込まれている。断面はU字状を呈しており、粘土質でやや硬い土層が堆積している。出土遺物としては、少量の土師器破片が出土した程度で、時期決定可能な遺物及び図示可能な遺物は皆無である。

5、土 坑 (SK-1・2、第6図、図版Ⅲ)

土坑としては1区東側斜面部で、2基所在している。第1号土坑(SK-1)は、SI-5と重複し長方形を呈している。底面は平端で、壁はほぼ垂直に掘り込まれているが一部オーバーハングしている。第2号土坑(SK-2)は、SK-1の南側で長方形を呈している。底面は皿状で、壁はほぼ垂直に掘り込まれているが、西壁にはテラスを有し東壁はオーバーハングしている。

土層は2基とも黒色土・黒褐色土・暗褐色土・茶褐色土が堆積しており、粘土質で硬い土層である。堆積状況は自然堆積で、覆土内上層から土師器甕・高環・椀等の小破片が少量出土した程度で、図示不能である。

6、出 土 遺 物

出土遺物としては、土師器甕・高環・椀・埴・石製模造品・紡錘車・磨り石・鎌・埴輪等が出土している。以下に住居跡から遺構順に記述し、埴輪等はその後とした。

No1・2はSI-1よりの土師器高環では脚部と坏部欠損している。2は坏部底面中央・脚部土端及び先端部を欠損しており、内外面とも摩滅している。

No3はSI-2よりの石製模造品の有孔円盤で、孔を有していないが上下両面と側面に研磨痕が認

第2表 出土遺物一覧表1

出土遺物	種類	出土位置(+cm)	法量 (cm)					胎土	焼成	色調	器形・整形の特徴	
			口径	底径	現高	脚径	孔径					
1	SI-1	土師高坏	+15.0	18.4 × 17.5			6.8 × 6.5	小石・長石 石英・粗	良好	淡茶 褐色	脚部及び口縁部を一部欠損、全な器形 外面ヘラナデ、内面摩滅し整形不明	
2		土師高坏	+20.0	18.5		15.8		小石・長石 石英・粗	良好	茶褐色	坏体部1/4程と底面中央欠損、脚部上端と先端 部欠損、坏部内外面摩滅、脚部中央ヘラナデ	
3	SI-2	有孔 内盤	+0.0	径 2.2×2.0	厚 0.45	重 g		石質 滑石			孔が無く側面一部欠損 上下面と側面に研磨痕あり	
4	SI-6	土師 埴	+10.0		2.5	3.0		長石・石英 微粒子・密	良好	明褐色	体部中央以上を欠損、外面ヘラナデ・内面整形 不明、底面指頭押し、内外面やや摩滅	
5		土師 埴	+15.0	13.0 × 12.2	3.7 × 3.5	6.6 × 6.5		長石・石英 粒子・粗	良好	暗茶 褐色	全な器形、整形不明 内外面著しく摩滅	
6		土師 高坏	+6.0	推 10.2		5.4		長石・石英 粒子・粗	良好	淡茶 褐色	脚部欠損、口縁部1/4～1/5程残 内外面著しく摩滅し整形不明	
7		紡錘 車	+0.0	上径 2.5	下径 4.5	1.8	重 1.8 g	0.6			孔は斜めに穿たれている 上下両面に研磨痕あり	
8		自然 石	+0.0	長 13.2	幅 7.4	厚 4.3	重				自然石で一面のみ煤が付着しているが 赤化はしていない	
9		磨石		長 10.9	幅 7.7	厚 5.2					下縁欠損、自然石使用、履土内出土 右側面に使用痕あり、左側面赤褐色化	
10	SI-9	土師 器台	+30.0		13.4	6.4		雲母・長石 石英・密	良好	明褐色	口縁部と脚部欠損、体部1/2程残、孔無し 内外面やや摩滅、内外面ヘラナデ、裏面磨台	
11		土師 埴	+25.0		4.0	6.1		長石・石英 粒子・粗	良好	明茶 褐色	口縁部欠損、体部1/6程遺存 内外面著しく摩滅、整形不明	
12		土師 坏	+8.0	推 7.0	3.5	3.2		長石・石英 微粒子・密	良好	暗赤 褐色	体部1/3程欠損、内外面摩滅 内外面ヘラナデ後赤彩	
13	SI-11	土師 埴	+8.0		6.8	5.0		長石・石英 粒子・粗	良好	暗茶 褐色	体部下平片で、外面斜いヘラナデ、内面摩滅 底面ヘラナデ、内外面やや摩滅	
14		土師 埴	+6.0		4.1 × 3.6	6.3		長石・石英 粒子・粗	良好	明茶 褐色	口縁部欠、体部1/2程欠損 体部上半摩滅下半・底面ヘラナデ、内面摩滅	
15		土師 埴	+5.0		6.7			長石・石英 微粒子・密	良好	暗茶 褐色	口縁部欠損、体部1/2程欠損。 横で、内外面著しく摩滅し整形不明	
16		土師 高坏	+15.0	推 20.1		8.7		長石・石英 粒子・粗	良好	淡茶 褐色	口縁部1/4程残、脚部欠損 内外面著しく摩滅し整形不明	
17		土師 埴	+13.0	10.1	2.6 × 2.0	9.2 × 9.3		長石・石英 粒子・粗	良好	暗茶 褐色	小型平底皿で全な器形、体部・口縁部を一部欠損 内外面やや摩滅、内外面ヘラナデか	
18		土師 埴	+5.0		4.8 × 4.2	5.5		小石・長石 石英・微密	良好	明茶 褐色	体部上半欠損、体部外面ヘラナデ内面ヘラナデ 底面ヘラナデ、内外面やや摩滅、一括遺物	
19	SI-12	紡錘 車	+0.0	上径 3.8	下径 4.5	厚 2.6	重	0.8	長石・石英 粒子・粗	良好	淡暗 褐色	土製紡錘車で、上面端部を一部欠損 外面摩滅し整形不明
20		土師 埴	+0.0	推 20.4		6.7		長石・石英 粒子・粗	良好	淡明 褐色	口縁部片で、1/6～1/8程残 内外面著しく摩滅し整形不明	
21	SI-13	土師 高坏	+0.0		10.5	推 10.9		長石・石英 粒子・粗	良好	茶褐色	口縁部片で、1/6～1/8程残 内外面著しく摩滅し整形不明	

第3表 出土遺物一覧表2

出土遺物	種類 器種	出土 位置 (+cm)	法量 (cm)					胎土	焼成	色調	胎形・整形の特徴	
			口径	底径	現高	脚径	孔径					
22	SI-13	土師 高環	+10.0	推 17.8		14.4			長石・石英 粒子・粗	良好	暗茶 褐色	口縁部1/3程度、脚部欠損、脚部に孔無し 全体的に摩滅が著しい、許裁穴出土
23		土師 壺	+8.0	21.7		6.4			長石・石英 粒子・粗	良好	明茶 褐色	口縁部片で1/3程、体部欠損 内外面摩滅し整形不明
24		土師 高環	+8.0			14.5	12.0		長石・石英 粒・粗	良好	茶褐色	口縁部欠・体部1/3程度、脚部1/4程度、脚部に 孔無し、内外面とも著しく摩滅し整形不明
25		土師 高環	+8.0			11.0		1.0	長石・石英 粒・粗	良好	明茶 褐色	環部上半と脚部先端欠損、孔は1孔で下方より 穿つ環部→脚部は外面ヘラナデ、環部内面摩滅
26	SI-14	鉄製結 籠	+0.0	長 13.0	幅 2.6	厚 2.6	重 0.6 g					肩部先端欠損、底部欠損
27		土師 壺	+0.0	推 17.8		7.5			長石・石英 微粒・密	良好	淡褐色	体部上半以下欠損、口縁→体部まで1/5程欠 内外面摩滅し整形不明
28		土師 壺	+0.0	推 9.0	3.0	4.7			長石・石英 粒子・粗	良好	暗茶 褐色	体部→口縁部1/4程度、許裁穴出土 内外面著しく摩滅し整形不明
29		土師 壺	+10.0	16.8		5.3			長石・石英 粒子・粗	良好	明茶 褐色	体部上半以下を欠損 内外面ヘラナデ、内外面やや摩滅
30		土師 壺	+10.0	径 21.0 × 22.0	6.3	25.7			長石・石英 粒子・粗	良好	暗茶 褐色	口縁部一部欠、体部1/2底部1/3程欠 復元実測、内外面著しく摩滅し整形不明
31	SI-15	土師 壺	+0.0	推 15.2		11.1 8.4			雲母・長石 石英・密	良好	淡黒 褐色	体部中央以下欠き、1/5～1/6程の破片 口縁部破片ヘラナデ、体部左下りのヘラナデ
32		土師 壺	+3.0	推 18.6		16.8			長石・石英 粒子・粗	良好	淡灰 褐色	体部下半以下を欠き、1/6～1/7程の破片、 口縁部破片ヘラナデ体部右下がりヘラナデ、 窪赤彩痕あり
33	SI-17	土師 壺	+0.0		8.5 × 8.0	14.0			長石・石英 微粒・密	良好	淡明 褐色	体部中央以下欠損、内外面やや摩滅し整形不明 復元実測
34		土師 壺	+5.0	推 10.0	6.5 × 6.0	5.5			長石・石英 粒・粗	良好	明褐色	手捏土器、体部1/3程欠 1縁→体部上半ナデ下半摩滅
35		土師 壺	+5.0	推 14.0		推 11.9	体部径 11.1		長石・石英 粒子・粗	良好	暗茶 褐色	口縁部1/5～1/6程度、体部先端欠、内外やや摩滅 口縁部破片ヘラナデ後ヘラナデ体部ヘラナデ、 復元実測
36		磨石	+5.0	長 5.9	幅 6.2	厚 3.7	重 g		長石・石英 微粒・密			1/2程の破片、上面と側面に使用痕り 下面中央部は赤褐色化している
37		磨石	+3.0	長 9.5	幅 5.8	厚 4.1	重 g		長石・石英 粒子・粗			両先端と右側面に使用痕りあり 上面中央部は赤褐色化している
38		磨石	+5.0	長 10.8	幅 7.7	厚 5.1	重 g		長石・石英 粒子・粗			上面中央に磨痕あり 両先端と右側面に使用痕りあり
39		土師 壺	+5.0	21.5 × 20.2	4.5	35.4			小石・長石 石英・微密	良好	明茶 褐色	新貯蔵穴出土、復元実測、体部・底部一部欠 内外面ヘラナデ、内外面やや摩滅
40	SI-18	土師 壺	+25.0	推	3.0 × 2.3	6.3			長石・石英 粒子・粗	良好	淡茶 褐色	口縁部欠、体部・部欠、復元十一指 内外面ヘラナデ
41	SI-21	土師 高環	+0.0	20.5		18.3	15.0		長石・石英 粒子・粗	良好	明茶 褐色	環部1縁部欠・環1/3程先端部欠、孔無し 脚中央破片ヘラナデ、環・脚内外面摩滅で整形不明
42	SI-22	土師 高環	+0.0	推 16.7		14.1	11.1		長石・石英 粒子・粗	良好	暗茶 褐色	環部1/3脚部1/2程度、孔無し、復元実測 内外面著しく摩滅し整形不明

第4表 出土遺物一覧表3

出土遺物	種類 種類	出土 位置 (+cm)	法草 (cm)					胎土	焼成	色調	器形・整形の特徴			
			口径	底径	現高	脚径	孔径							
43	SI-22	十部 高坪	+0.0	16.5	14.2 × 14.7		推 17.8				長石・石英 粒子・粗	良好	明茶 褐色	口縁部 1/3 と脚部 2/3 程欠、坯部下半ハケ目・ ヘラナデ先端ハケ目整形、内外面一部摩滅
44	TM-1	内筒 埴輪	一括								雲母・長石 石英・粗	良好	暗茶 褐色	埴輪口縁部片、口内面内外面磨成ヘラナデ下半埴輪 刷毛目整形、内面刷毛目とナデ、 内外面やや摩滅
45		内筒 埴輪	一括								雲母・長石 石英・粗	良好	暗茶 褐色	埴輪口縁部片、外面刷毛目内面とナデ 内外面摩滅
46		内筒 埴輪	一括								雲母・長石 石英・粗	良好	淡褐色	口内面内外面とナデ、下半外面刷毛目内面ナデ 磨成胎土、外面整形比較的良好
47		内筒 埴輪	一括								雲母・長石 石英・粗	良好	暗茶 褐色	埴輪部部分片、帯は低い三角形状 外面刷毛目内面刷毛目とナデ整形
48		内筒 埴輪	一括								雲母・長石 石英・粗	良好	淡茶 褐色	埴輪部部分片、帯は低い三角形状、磨成胎土 外面刷毛目、内面刷毛目整形
49		内筒 埴輪	一括								小石・長石 石英・粗	良好	暗茶 褐色	埴輪部部分片、帯は低い台形状、粗い胎土 外面刷毛目内面ナデ整形
50		内筒 埴輪	一括								雲母・長石 石英・粗	良好	暗茶 褐色	埴輪部部分片、帯は低い三角形状 外面刷毛目整形、内面摩滅で整形不明
51	2区 括	内筒 埴輪	一括		16.0	6.0					小石・長石 石英・粗	良好	明茶 褐色	埴輪1帯差1/4程欠、帯は低い台形状、粘土板巻き 外面刷毛目整形、内面摩滅整形不明
52	TM-1	内筒 埴輪	一括		11.6 × 10.8	7.2					雲母・長石 石英・粗	良好	茶褐色	埴輪底部片、粘土板は左巻き 外面刷毛目内面刷毛目とナデ整形
53		内筒 埴輪	一括		推 13.0	7.1					雲母・長石 石英・粗	良好	暗茶 褐色	埴輪底部 1/4 ~ 1/5 程の破片、磨成胎土で左巻き 外面刷毛目内面刷毛目とナデ整形

められる。

No 4 ~ 9 は、S I - 8 よりの出土遺物である。4 は土師器小型平底埴であり、体部中央以上を欠損している。5 は土師器碗であるが歪な器形で、内外面とも著しく摩滅しており整形は不明である。6 は土師器高坪であるが、内外面とも著しく摩滅しており整形は不明である。7 は滑石製紡錘車であり、上面には研磨痕が認められる。8 は自然石で、使用痕は認められないが一面に煤が付着している。9 は自然石を使用した磨り石である。片方の先端を欠損し、右側面に使用痕を有しており、左側面は赤褐色化している。

No 10 ~ 12 は S I - 9 よりの出土遺物で、9 は土師器裝飾器台片である。器台と口縁部を欠損しており、孔は認められず内外面摩滅している。10 は土師器碗で、口縁部を欠き内外面著しく摩滅している。11 は土師器坪で、内外面摩滅しているが体部内外面に赤彩が認められる。

No 13 ~ 18 は、S I - 11 よりの出土遺物である。13 は口縁部以下を欠損する土師器甕であり、内面が摩滅しており、整形は不明である。14 は土師器坪で、口縁部と体部上半を 1/2 程を欠損しており底部は平底である。15 は土師器碗で口縁部を欠き丸底であるが、内外面とも著しく摩滅している。16 は土師器高坪で、脚部を欠損している。内外面著しく摩滅しており、整形不明である。17 は土師器坪で小型平底埴である。内外面がやや摩滅しており、ヘラナデが施されているようである。18 は土師器碗

で、体部中央以上を欠損している。内外面ともに、やや摩滅している。

No 19・20は、S I - 12よりの出土遺物である。19は土製紡錘車で一部欠損している。粗い胎土で外面は著しく摩滅している。20は土師器甕片であるが、内外面著しく摩滅しており整形不明である。20は土師器甕環で、頸部以下を欠損している。歪な器形で、内面は摩滅している。

No 21～25は、S I - 13よりの出土遺物である。21は土師器高環であり、坏体部上半以上と脚部上端の一部を欠損しており復元実測である。孔は認められなかった。22は土師器高環で、脚部先端を欠損し孔は認められず、全体的に著しく摩滅しているため整形不明である。23は土師器甕で頸部以上1/3程の破片で、口唇部がヘラナデである以外は、摩滅により整形不明である。24は土師器高環で、口縁部を欠き脚部に孔は認められ無い。内外面摩滅し、整形不明である。25は土師器高環で、坏体部と脚下半を欠損している。孔は脚中央部に1孔が、下方より穿たれている。

No 26～30はS I - 14よりの出土遺物で、26は鉄製鎌である。先端部と茎部を欠損しており、錆化が進んでいる。27は土師器甕で体部上半以下を欠損し、口縁部より体部上半まで1/5程を欠損している。28は貯蔵穴内より出土した土師器椀で、体部上半1/4程を遺存している。内外面とも摩滅しており、整形は不明である。29は貯蔵穴内より出土した土師器甕で、体部上半以下を欠損している。口縁部がやや薄い器厚の甕である。30は貯蔵穴内より出土した土師器甕で、復元実測による遺物である。内外面とも著しく摩滅しており、整形は不明である。

No 31・32はS I - 15よりの出土遺物で、31は小型の土師器甕である。体部中央以下を欠損しており、頸部がやや薄い器厚となっている。32は土師器甕で内外面やや摩滅しているが、体部上端に赤彩が認められる。赤彩されている甕は、この遺物のみである。

No 33～39はS I - 17よりの出土遺物で、33は土師器甕である。体部中央以上を欠損しており、復元実測した甕である。34は土師器椀であるが、手捏土器でやや歪な器形である。35は土師器埜で、口縁部下端を欠損しており、復元実測遺物で大型の丸底埜である。36は磨り石で、下半を欠損している。上面と側面に使用痕があり、側面中央部は赤褐色化している。37は磨り石で、上・下先端と左側面に使用痕が認められる。また上面中央部は、赤褐色化している。38は敲石で上面中央には敲痕と、両先端と右側面に使用痕が認められる。39は土師器甕で、新貯蔵穴内よりの出土である。やや歪な器形であり内外面摩滅している。復元実測の遺物である。

No 40はS I - 18よりの出土遺物で、土師器甕である。口縁部1/4程の破片で、内外面ヘラナデが施されている。

No 41はS I - 21よりの出土遺物で、土師器高環である。口縁部と脚先端の一部と、脚中央部を2/3程欠損している。脚部に孔が無く、縦位のヘラナデ整形であるが、他の部分は摩滅し整形不明である。

No 42・43はS I - 22よりの出土遺物で、土師器高環である。坏部1/3と脚部1/2程遺存しているが脚に孔は無く内外面とも摩滅し整形不明である。43は口縁部1/3と脚部2/3程を欠損しており、坏部下半と脚先端は刷毛目整形であり、脚中央はヘラナデである。坏部上半は内外面摩滅している。

No 43～53はTM-1と2区一括の遺物で、円筒埜輪片である。全て破片のため、比較的遺存状況の良い破片を選び図示した。44～46は、口縁部片である。口唇部は内外面とも横位ヘラナデで、下半は外面が縦位刷毛目で内面はナデと一部斜位の刷毛目整形である。47～50は、帯部分の破片である。帯は低く台形状を呈する帯、これらより低く三角形を呈する帯が有る。外面は帯の上下とも縦位刷毛

目整形であり、内面は粗いナデ整形である。51～53は、底部から1帯までの破片である。51は1帯以上を欠損しており、1帯までは4.7cmを計測する。外面は粗い刷毛目整形であるが、内面は摩滅している。帯は低い台形状で、粘土紐は左巻きである。52・53は、1帯以下の破片である。外面は刷毛目整形で、内面はナデと一部刷毛目整形を併用している。粘土紐は、左巻きである。

以上が今回報告する遺物であるが、住居跡・溝・塚の覆土より縄文式土器片と弥生式土器片が出土しているが、今回は紙数の関係上除外し別の機会に報告することとする。

V ま と め

於下大峰遺跡は、霞ヶ浦に突出する舌状台地の最先端部で、狭い平坦部（1区500㎡、2区900㎡）に古墳時代の住居跡が22軒も所在することは、麻生町では初めての調査結果であり注目されることである。時期的には、古墳時代前期（五領期）と中期（和泉期）の住居跡で、2区に集中する傾向を有している。

1区は平坦部が狭いため3軒に止まり、東側斜面部に工房跡を建てたことと推定される。個々の住居跡には、各々差異を有している。工房跡は1区東側斜面部で、規模も小さく出土遺物と遺構の状況から「住」と規定するよりは、「工房跡」と判断するほうが適切と考えられる。

2区では、台地の全域に所在しているが、前期では中央より東側に集中しており、中期では中央東側に集中する傾向を有している。また北側にも集落が広がっているようである。

出土遺物としては、土師器甕・高環・椀・刀子・石製模造品・磨石・埴輪等が出土しているが、土師器は内外面著しく摩滅しており、整形の不明な遺物がほとんどであり復元も不可能な遺物が中心である。このため、復元実測とした遺物も認められる。また装飾器台が出土したことは、麻生町での最初の報告例ではなからうか。

甕としては、No20・27・39のような複合口縁部を有する甕と、No23のように外傾させ外面に稜を形成する甕及び、29・30・31・32のように直線的に外傾する甕が出土している。29～32は体部中央に最大径を有し、半球状の体部を呈する甕である。

高環としては、口縁部が外傾し、脚先端が外開きし無孔の脚が中心であるがNo25のみが下方より小孔を穿っている。

埴・椀類ではNo5・17・34が完形品に近い遺物である。No5は底部平底で底面中央が薄い器厚であり、17は底面中央が内傾し、体部上半に最大径を有している。34は手捏土器である。

有孔円盤としては、No3、1点のみで無孔であるが、比較的良好な砥磨である。No7・19は、紡錘車である。7は滑石製の紡錘車であり、良く砥磨されている。19は土製紡錘車であるが、粗い整形である。

No8・9・36～38は、自然石を使用した磨石・蔽石である。8は煤が付着しているが、9・36・37は火力による赤褐色化が認められる。38は蔽石である。

埴輪はSD-2とTM-1より底部から口縁部まで出土しているが、全て破片で復元不能である。埴輪は古墳に伴う遺物であり、SD-2より出土していることは本跡が古墳の周溝である可能性を有しているが、周溝と判断される溝は他に無く主体部も認められなかった。しかし古墳が所在したことは、遺物から明らかで塚や開墾により破壊・消失したと推定される。埴輪片としては、底部の状況から粘土紐は左巻きで15個体程が小破片で出土しており、帯のスタイル等から6世紀末頃に位置するようで

ある。

塚は報告したように、時期を決定する具体的な遺物は出土しておらず、出土遺物としては土師器甕・高坏・碗・雲母片岩が破片で出土している。塚封土内からの出土で、特に集中する土層は認められず混在している。また雲母片岩は、古墳の石棺に使用されたものと判断される。したがって、本塚は古墳時代以降中近世までとなるが、近世の物見塚ではなかろうか。当於下大峰遺跡付近には、水戸天狗党の見張り用の塚を造ったとの記録が有ることから、水戸天狗党の乱で麻生町が混乱した元治元年（1864）頃に造られた塚と推定される。（なお、塚より出土した弥生式土器片は、紙数の関係から回を改ためて報告する。）

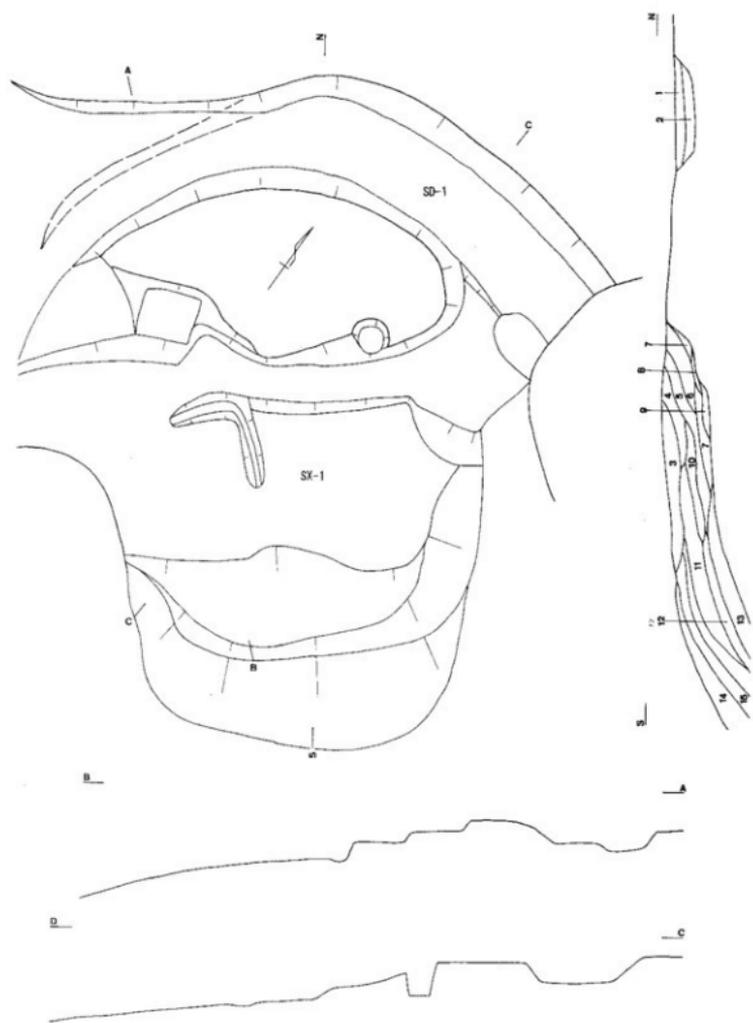
調査終了から現在まで、報告書の刊行が諸般の事情により今日まで遅れ、麻生町関係者の方々に多大のご迷惑を掛けました事に対し深謝する次第である。また整理に際して、日本考古学研究所の協力が有ったため、誌上であるが感謝する次第である。

【参考文献】

- 「麻生町史・通史編」平成14年2月 麻生町史編纂委員会
- 「麻生町史・資料編・麻生日記書抜1」平成13年3月 麻生町史編纂委員会
- 「天狗騒動随聞」箕輪憲夫 麻生の文化第15号所収 昭和50年11月 麻生町郷土文化研究会
- 「天狗党の合戦遺跡調査」鈴木久弥 麻生の文化第23号所収
平成4年3月 麻生町郷土文化研究会
- 「麻生町小字名考」平成5年3月 麻生町郷土文化研究会 麻生町教育委員会
- 「下総の町史・通史・原始古代編」平成5年3月 下総町史編纂委員会
- 「長峰域跡（長峰遺跡・長峰古墳群）」鶴茨城県教育財団文化財調査報告第184集
平成14年3月 鶴茨城県教育財団
- 「大麻古墳群（5号墳）調査報告書」1999年9月 麻生町遺跡調査会
- 「北野原遺跡調査報告書」平成8年12月 龍ヶ崎市北野原遺跡調査会
- 「林遺跡調査報告書」平成16年3月 竜ヶ崎市教育委員会
- 「三渡Ⅱ遺跡発掘調査報告書」平成16年9月 神栖町教育委員会
- 「大和田坂ノ上遺跡」1988 下総町大和田坂ノ上遺跡調査会

VI 報告書抄録

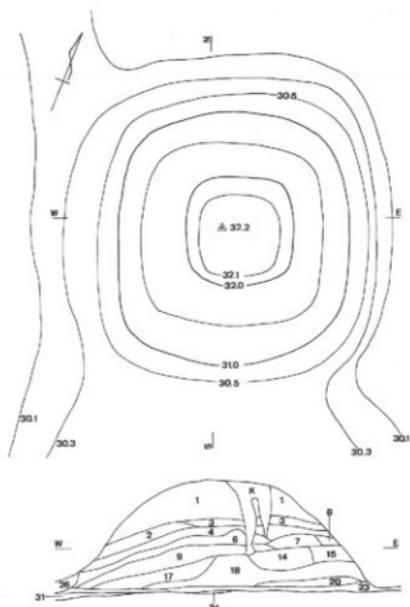
ふりがな	いばらきけんなめがたぐんあそうまち おしとおおみわいせきちようさほうこくしょ							
書名	茨城県行方郡麻生町 於下大峰遺跡調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編者名	藤原 均							
編集機関	常総考古学研究所・麻生町遺跡調査会							
所在地	千葉県佐倉市山崎179-8・043-485-8381、麻生町大字麻生1561-9・0299-72-0811 等							
発行年月日	平成17年3月30日							
収録遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
於下大峰遺跡	茨城県行方郡麻生町於下	421	300	36° 27' 0"	140° 27' 34"	平成14年8月より 平成17年3月	1,500 m ²	土採取に 先行する 埋蔵文化 財の調査
収録遺跡	種別	時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
於下大峰遺跡	古墳 集落 他	古墳時代 古墳時代 前・中剛 近世		不明 住居跡 22軒 溝 基壇		埴輪 土師器壺・碗・高環 石製模造品等 なし 土師器壺・高環・碗等		主体部・瓦溝 不明 埴輪片のみ 性格不明



土層凡例

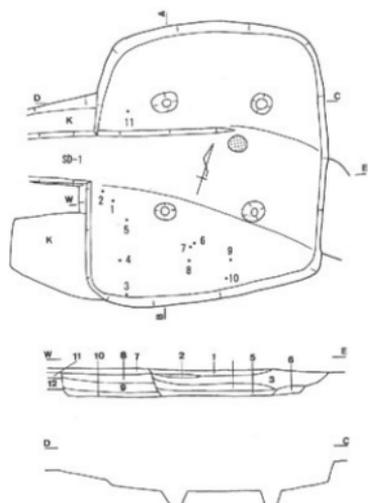
- | | |
|-------------------------------|-------------------------------|
| 1) 黒色土 (砂質、砂粒子を含む) | 9) 黒褐色土 (明るく砂質、白色砂粒子を含む) |
| 2) 黒褐色土 (砂質、砂粒子と粘度粒子を含む) | 10) 黒褐色土 (硬く粘土質、砂粒子と砂ブロックを含む) |
| 3) 白色砂 (暗、硬質、粘土質、茶褐色砂ブロックを含む) | 11) 黒褐色土 (硬く粘土質、砂粒子を含む) |
| 4) 茶褐色砂 (暗、硬質、粘度粒子を含む) | 12) 明黒褐色土 (硬く砂質、砂粒多く含む) |
| 5) 明暗褐色土 (硬く粘土質、粘土粒子を含む) | 13) 白色砂 (自然砂) |
| 6) 明黒褐色土 (硬く粘土質、砂粒子を含む) | 14) 表土 |
| 7) 暗褐色砂 (黒色土粒子を含む) | 15) 黒褐色土 (硬く硬質、ややくすむ) |
| 8) 黒褐色砂 | 16) 茶褐色砂 |

第4図 遺構実測図 (基壇状遺構、第4号溝 SX-1・SD-4 S=1/100 L=28.80)



- ### 土層凡例
- 1) 茶褐色土 (表土化、軟質)
 - 2) 黒褐色土 (硬質、粘土粒・LR含む)
 - 3) 黄褐色土 (硬質、LR・LB・粘土粒を含む)
 - 4) 暗褐色土 (硬質、LR・LB・粘土粒含む)
 - 5) 暗褐色土 (硬質、LR・LB・粘土粒含む)
 - 6) 粘土ブロック (硬質、LR・LB含む)
 - 7) 粘土ブロック (硬質、黒色土粒・LR含む)
 - 8) 黒褐色土 (硬質、粘土粒、LR含む)
 - 9) 明褐色土 (くすむ、硬質)
 - 10) 黒色土 (やや軟質、ブロック状)
 - 11) 黒褐色土 (硬質、LR・LB・粘土Bを含む)
 - 12) 暗褐色土 (硬質、LR含む)
 - 13) 黒褐色土 (軟質、分解している、LR含む)
 - 14) 黄褐色土 (硬質、粘性有)
 - 15) 黒褐色土 (硬質、明、ブロック状)
 - 16) 黒色土 (明、硬質、LR・LB含む)
 - 17) 暗褐色土 (硬質、LB・粘土Bを含む)
 - 18) 明褐色土 (硬質、LB・粘土粒含む)
 - 19) 黒褐色土 (硬質、LR・LB・粘土Bを含む)
 - 20) 暗褐色土 (LR・LB・粘土B含む、器)
 - 21) 粘土ブロック (白色粘土ブロック)
 - 22) 黒色土 (硬質、LR・LR含む)
 - 23) 黒褐色土 (明硬質、LR・LB含む、ブロック状)
 - 24) 黄褐色土 (粘性有、LR・LB含む)
 - 25) 黄褐色土 (明、やや硬、粘土質)
 - 26) 黄褐色土 (粘性有、やや硬質)
 - 27) 黄褐色土 (硬質、ブロック状)
 - 28) 明褐色土 (硬質、粘性有、LB含む)
 - 29) 暗褐色土 (硬質、LB・粘土粒・黒色土粒含む)
 - 30) 黒色土 (硬質、LB・LR含む)
 - 31) 黒褐色土 (やや軟質、粘土粒・LB含む)

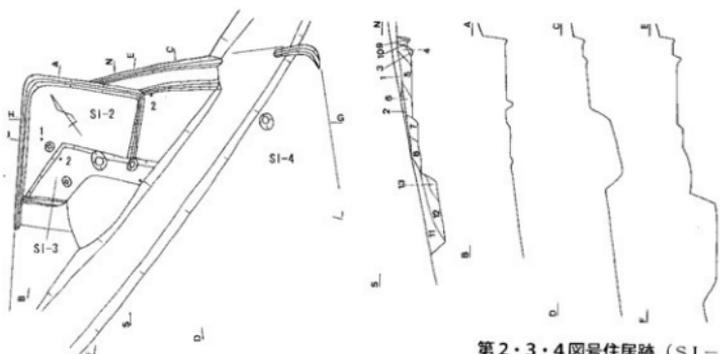
1号塚 (TM-1 L=31.60m)



- ### 土層凡例
- (SD-1)
- 1) 茶褐色砂 (硬質)
 - 2) 暗褐色土 (砂質、茶褐色砂ブロック含む)
 - 3) 暗褐色土 (砂質、やや硬質)
 - 4) 明黒色土 (砂質、茶褐色砂ブロック含む)
 - 5) 明黒色土 (白色砂、茶褐色砂粒含む)
 - 6) 暗褐色土 (粘土粒含む、軟質)
- (SD-2)
- 7) 茶褐色砂 (硬質、砂粒含む)
 - 8) 暗褐色土 (明、軟質、砂粒含む)
 - 9) 暗褐色土 (明、砂質、砂粒含む)
 - 10) 明黒色土 (軟質、黒色土ブロックを含む)
 - 11) 明黒色土 (砂質、硬質、砂粒含む)
 - 12) 暗褐色土 (硬質、砂粒含む)

第1号住居跡 (S I - 1 L=27.60m)

第5図 遺構実測図2 (1号塚・第1号住居跡 S=1:100)

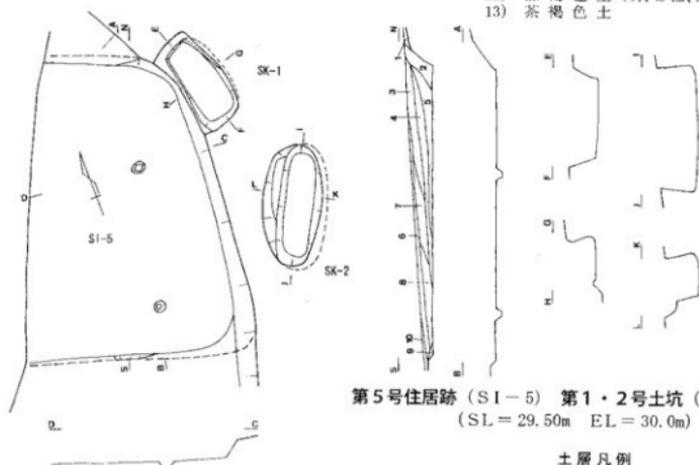


第2・3・4号住居跡 (SI-2・3・4)

(SL = 30.0m EL = 29.90m)

土層凡例

- 1) 黒褐色土 (硬く粘土質、砂粒、粘土粒含む)
- 2) 黒褐色土 (粘土質、粘土粒、砂粒含む)
- 3) 明褐色土 (粘土質、くすむ、砂粒含む)
- 4) 黒褐色土 (明、粘土質、砂粒を含む)
- 5) 黒褐色土 (粘土質、砂粒を含む)
- 6) 黒色土 (粘土質、砂粒含む、やや硬質)
- 7) 黒色土 (粘土質、自然炭化物粒含む)
- 8) 暗褐色土 (硬く砂質、砂粒含む)
- 9) 明褐色土 (やや硬く粘土質、砂粒含む)
- 10) 明褐色土 (粘土質で硬質、粘土粒、砂粒含む)
- 11) 暗褐色土 (砂質で硬質)
- 12) 黒褐色土 (明、砂粒、茶褐色砂ブロックを含む)
- 13) 茶褐色土



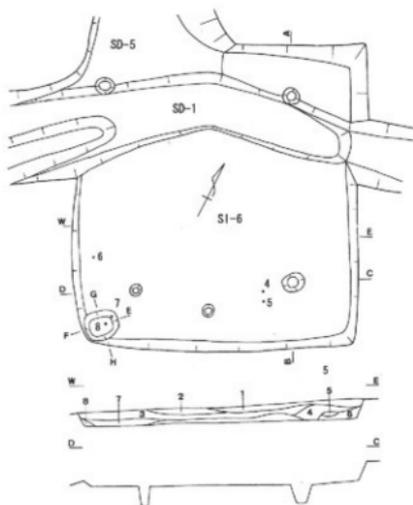
第5号住居跡 (SI-5) 第1・2号土坑 (SK-1・2)

(SL = 29.50m EL = 30.0m)

土層凡例

- 1) 暗褐色土 (粘土質、砂粒含む)
- 2) 暗褐色土 (粘土質、茶褐色砂粒含む)
- 3) 黒色土 (明、砂質で硬質)
- 4) 暗褐色土 (くすむ、砂質、粘土粒含む)
- 5) 黒褐色土 (砂質、粘土ブロック、粘土粒含む)
- 6) 暗茶褐色砂
- 7) 暗褐色土 (砂質、粘土粒含む)
- 8) 黒褐色土 (砂質、粘土粒、砂粒含む)
- 9) 白色砂 (くすむ、軟質)
- 10) 暗褐色土 (粘土質、砂粒を含む)

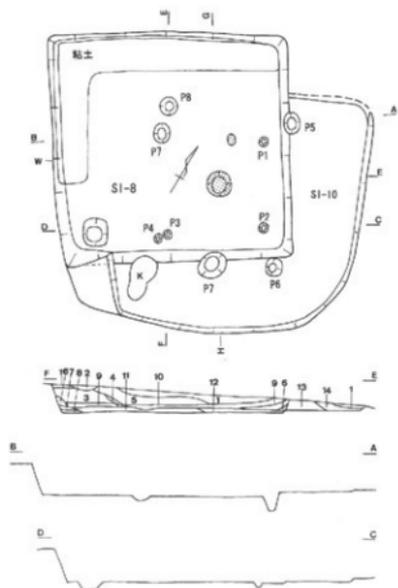
第6図 遺構実測図3 (第2・3・4・5号住居跡 第1・2号土坑)



土層凡例

- 1) 暗褐色土
(硬く硬質、茶褐色砂小ブロックを含む)
- 2) 暗褐色土 (硬く硬質、粘度粒含む)
- 3) 明黒褐色土 (粘土質、砂粒含む)
- 4) 黒褐色土 (黄褐色砂ブロックを含む)
- 5) 黒色土 (炭化物・焼土粒子含む)
- 6) 黄白色砂
- 7) 明褐色土 (硬く粘土質、砂粒含む)
- 8) 黄褐色土 (硬く砂質)

第6号住居跡 (SI-6・L=29.20m)



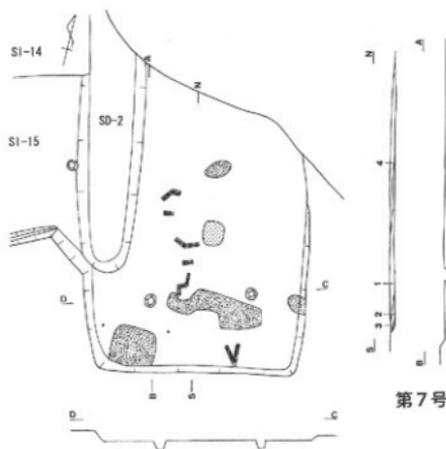
土層凡例

- 1) 暗褐色土
(硬く粘土質)
- 2) 明褐色粘土
- 3) 明褐色土
(硬く粘土質、LR・炭化物含む)
- 4) 明褐色土
(焼土粒・炭化物を含む)
- 5) 暗褐色土
(硬く粘土質、焼土粒・炭化物を含む)
- 6) 暗褐色土
(硬質、粘度粒・粘土ブロックを含む)
- 7) 白色粘土 (ブロック状)
- 8) 茶褐色粘土 (ブロック状)
- 9) 白色粘土 (暗、ブロック状)
- 10) 黒褐色土
(LR、焼土粒・炭化物を含む)
- 11) 暗褐色土
(粘土質、粘土ブロック・粘土粒を含む)
- 12) 黒褐色土
(粘土質、粘土粒を含む)
- 13) 黒褐色土
(焼土粒・炭化物を含む)
- 14) 暗褐色土
(粘土質、炭化物を含む)

第8・10号住居跡

(SI-8・10 L=31.0m)

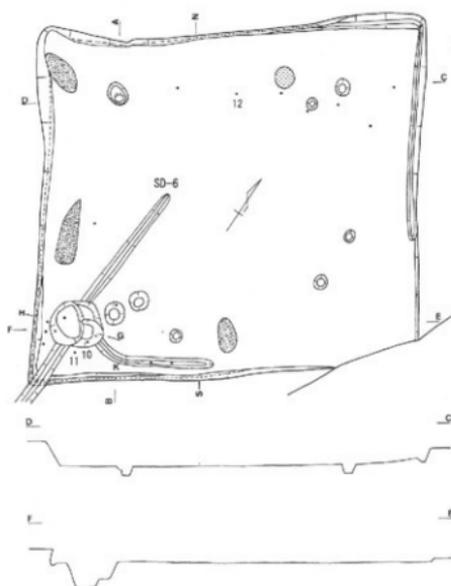
第7図 遺構実測図4 (第6・8・10号住居跡)



第7号住居跡 (SI-7・L=31.30m)

土層凡例

- 1) 黒色土
(粘土質、L.R・焼土粒・炭化物を含む)
- 2) 黒褐色土
(粘土質、焼土粒・炭化物を含む)
- 3) 黒褐色土
(粘土質、粘土粒・焼土粒含む)
- 4) 黒褐色土
(L.R・炭化物・焼土粒子を含む)



第9号住居跡
(SI-9 L=31.0m)

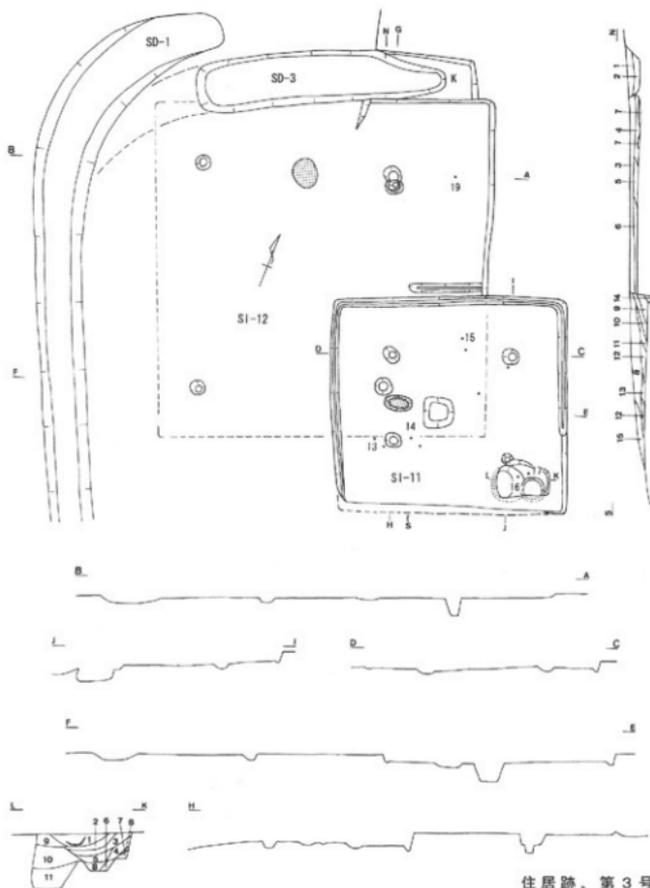
土層凡例

- 1) 暗褐色土
(硬く粘土質)
- 2) 明褐色粘土
- 3) 明褐色土
(粘土質で硬質、L.R・炭化物を含む)
- 4) 明褐色土
(焼土粒・炭化物を含む)
- 5) 暗褐色土
(粘土質で硬質、焼土粒・炭化物を含む)
- 6) 暗褐色土
(硬質、粘度粒・粘土ブロックを含む)
- 7) 白色粘土
- 8) 茶褐色粘土
- 9) 暗白色粘土
- 10) 黒褐色土
(L.R・焼土粒・炭化物を含む)
- 11) 暗褐色土
(粘土質、L.B・L.R・粘土ブロックを含む)
- 12) 黒褐色土
(粘土質、粘土粒含む)
- 13) 黒褐色土
(焼土粒・炭化物を含む)

貯蔵穴土層凡例

- 1) 黒褐色土 (焼土粒・粘土粒含む)
- 2) 黒色土 (粘土粒含む)
- 3) 暗白色粘土 (焼土粒含む)
- 4) 黒褐色土 (軟質、黒色土粒含む)
- 5) 黒色土 (焼土粒・粘土粒を含む)
- 6) 暗白色粘土 (粘土粒・粘土ブロックを含む)

第8図 遺構実測図5 (第7・9号住居跡)



(S = 1:50 L = 31.0m)

貯蔵穴土層凡例

- 1) 明黒褐色土 (焼土粒・粘土粒を含む)
- 2) 白色粘土 (炭化物・ブロック状を呈す)
- 3) 暗褐色土 (粘土質・粘土粒・炭化物粒を含む)
- 4) 明褐色土 (粘土質・焼土粒・炭化物粒・粘土粒を含む)
- 5) 明褐色土 (粘土質・焼土粒を含む)
- 6) 明褐色土 (くすむ・炭化物粒・焼土粒・粘土粒を含む)
- 7) 焼褐色土
- 8) 暗褐色土 (粘土粒を含む)
- 9) 黒褐色土 (焼土粒・粘土粒を含む)
- 10) 暗褐色土 (くすむ・LR・LB・炭化物・粘皮粒を含む)
- 11) 暗褐色土 (くすむ・LR・LB・粘土粒を含む)

住居跡、第3号溝土層凡例

第3号溝 (SD-3)

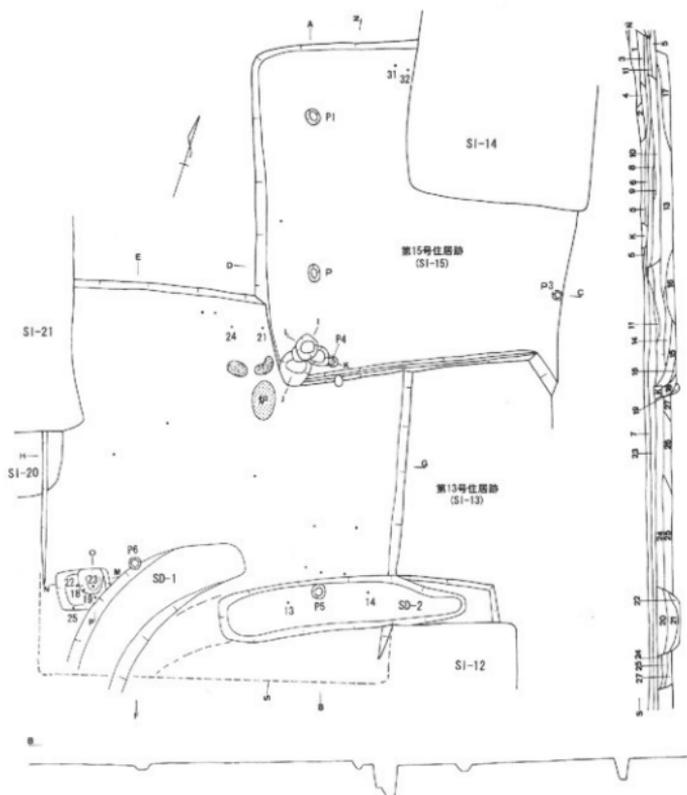
- 1) 黒色土 (明・粘土質でやや硬質、粘土粒子含む)
- 2) 黒色土 (粘土質で硬質、粘土粒子含む)

住居跡 (SI-11・12)

- 3) 明褐色土 (くすむ・粘土粒・粘土ブロック含む)
- 4) 黒褐色土 (粘土質で硬質、粘皮粒・粘土ブロック含む)
- 5) 黒褐色土 (粘土質でやや硬質、LR・炭化物を含む)
- 6) 黒色土 (粘土質で硬質、粘土粒含む)
- 7) 黒色土 (粘土質でやや硬質、粘土粒含む)
- 8) 暗褐色土 (硬く粘土質、LR・粘土粒を含む)
- 9) 明褐色土 (硬く粘土質、LR含む)
- 10) 明褐色土 (硬く粘土質、焼土粒・LR・焼土粒含む)
- 11) 暗褐色土 (硬く粘土質、焼土粒・焼土ブロック含む)
- 12) 黒褐色土 (硬く粘土質、焼土粒・焼土ブロックを含む)
- 13) 茶褐色土 (硬く粘土質、粘土粒・LR・粘土ブロック含む)
- 14) 黒褐色土 (硬く粘土質、粘土粒含む)
- 15) 茶褐色土 (硬く粘土質)

第9図 遺構実測図6

(第11・12号住居跡、第3号溝 SI-11・12、SD-3 SL = 31.40m EL = 31.20m)

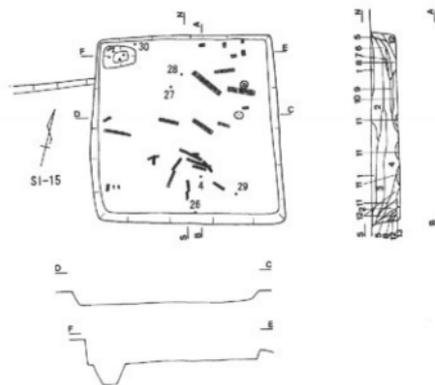


土層凡例

- 1) 黒色土 (硬質で粘土質)
- 2) 暗褐色土 (粘土ブロック・粘土粒・炭化物含む)
- 3) 暗褐色土 (粘土質、明)
- 4) 明褐色土 (粘土粒含む)
- 5) 明黄色土 (硬質、L.B・粘土ブロック含む)
- 6) 黒色土 (粘土粒含む)
- 7) 暗褐色土 (粘土粒・L.R・L.B含む)
- 8) 暗黄色土 (粘土粒・L.R・L.B・粘土ブロック含む)
- 9) 暗褐色土 (粘土質、粘土粒含む)
- 10) 暗黄色土 (粘土質、L.B・粘土粒含む)
- 11) 白色土 (L.B・L.R・炭化物含む)
- 12) 明褐色土 (L.R・粘土粒含む)
- 13) 暗褐色土 (<すむ、粘土粒含む)
- 14) 暗褐色土 (<すむ)
- 15) 暗褐色土 (明、粘土質、粘土粒含む)
- 16) 暗褐色土 (<すむ、粘土粒・L.R・L.B含む)
- 17) 暗褐色土 (<すむ、L.R・粘土粒含む)
- 18) 暗褐色土 (<すむ、硬質、粘土粒含む)
- 19) 暗褐色土 (硬く粘土質、粘土粒含む)
- 20) 白色土 (軟質、砂粒含む)
- 21) 黒色土 (<すむ、粘土質、硬質)
- 22) 暗褐色土 (<すむ、粘土質)
- 23) 暗褐色土 (<すむ、粘土質)
- 24) 暗褐色土 (<すむ、L.R・粘土粒含む)
- 25) 暗褐色土 (<すむ、L.R・粘土粒含む)
- 26) 暗褐色土 (<すむ、粘土質、L.R含む)
- 27) 明褐色土

K=攪乱

第10図 遺構実測図7 (第13・15号住居跡、SL=31.50m EL=31.20m)

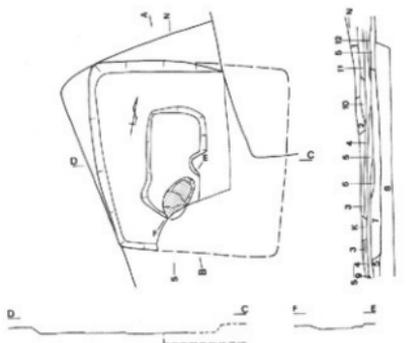


土層凡例

- 1) 黒色土 (粘土質・粘土粒・炭化物含む)
- 2) 黄褐色土 (LB主体、粘土ブロック含む)
- 3) 明褐色土 (LB・LR・粘土ブロック・粘土粒含む)
- 4) 暗褐色土 (粘土B・LB・LR・粘土粒含む)
- 5) 暗褐色土 (くすむ、粘土粒含む)
- 6) 暗褐色土 (粘土粒・粘土ブロック含む)
- 7) 黒褐色土 (粘土ブロック・炭化物含む)
- 8) 赤褐色土 (焼土・焼土痕・炭化物含む)
- 9) 赤褐色土 (焼土痕・焼土粒・粘土ブロック含む)
- 10) 黄褐色土 (LB主体、炭化物含む)
- 11) 炭化物
- 12) 暗褐色土 (くすむ、粘土粒・炭化物含む)
- 13) 暗褐色土 (くすむ、粘土ブロック・粘土粒含む)

第14号住居跡 (SI-14)

(SL = 31.0m EL = 31.50m)

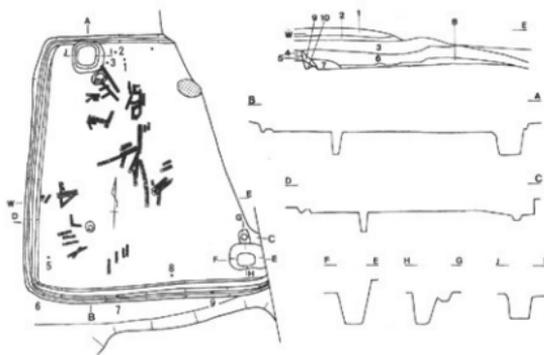


土層凡例

- 1) 黒色土 (硬質で粘土質)
- 2) 暗褐色土 (粘土ブロック・粘土粒・炭化物粒含む)
- 3) 黄褐色土 (LB・粘土ブロック含む)
- 4) 黒色土 (粘土粒含む)
- 5) 黄褐色土 (粘土質、LB・粘土粒含む)
- 6) 黄褐色土 (粘土質、LB・LR・粘土粒含む)
- 7) 黄褐色土 (粘土質、LB・粘土粒含む)
- 8) 黄褐色土 (LB・粘土ブロック含む)
- 9) 白色粘土 (くすむ)
- 10) 明褐色土 (粘土粒含む)
- 11) 白色粘土 (くすむ)
- 12) 白色粘土 (くすむ)

第16号住居跡 (SI-16)

(SL = 31.50m EL = 31.30m)



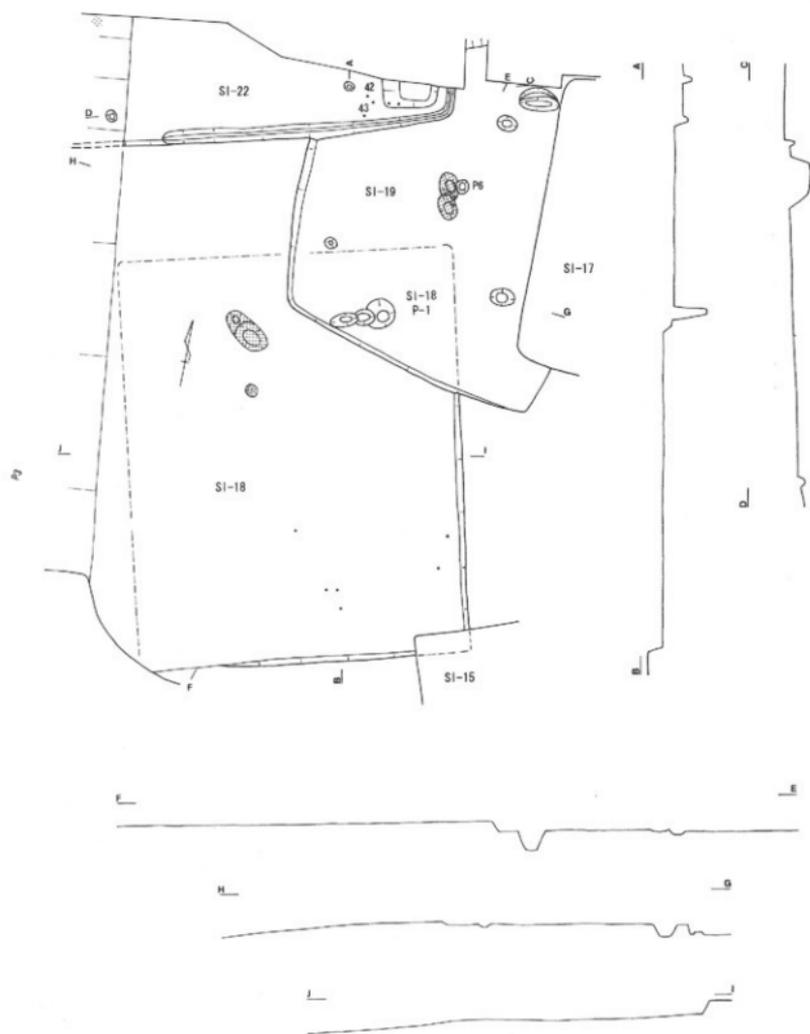
土層凡例

- 1) 塚封土 (表土)
- 2) 黒色土 (明、粘土質、旧表)
- 3) 黒褐色土 (粘土質、LR・炭化物含む)
- 4) 暗褐色土 (LR・焼土粒含む)
- 5) 黒褐色土 (LR・LB含む)
- 6) 黒褐色土 (粘土質、LB・LR・粘土粒含む)
- 7) 黒褐色土 (LR・LB・粘土粒含む)
- 8) 黒褐色土 (粘土粒・粘土ブロック・炭化物含む)
- 9) 黒褐色土 (LR・粘土粒含む)
- 10) 黒褐色土 (粘土痕・炭化物含む)

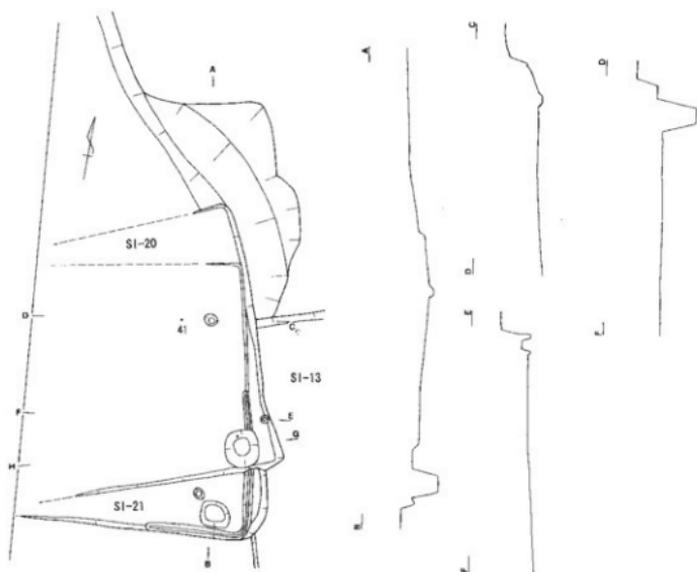
第17号住居跡 (SI-17)

(SL = 31.50m EL = 31.30m)

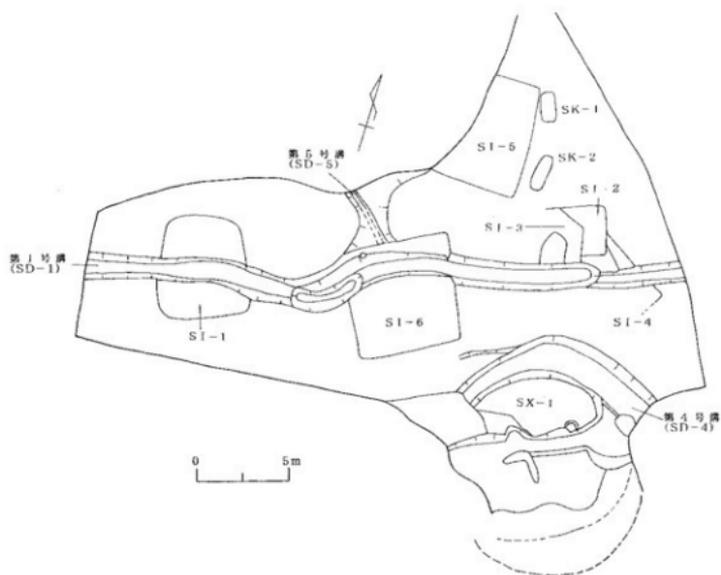
第11図 遺構実測図8 (第14・16・17号住居跡)



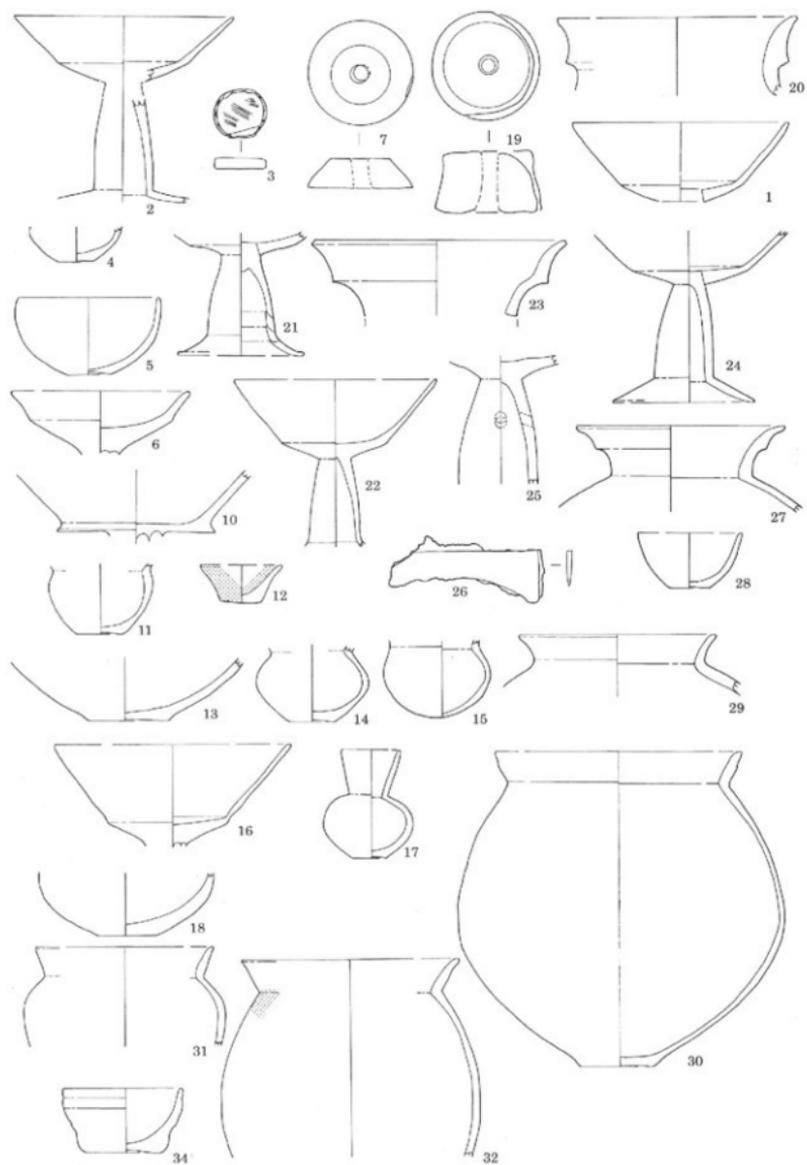
第 12 图 遺構実測図 9 (第 18・19・22 号住居跡、S I - 18・19・20 L = 31.0 m)



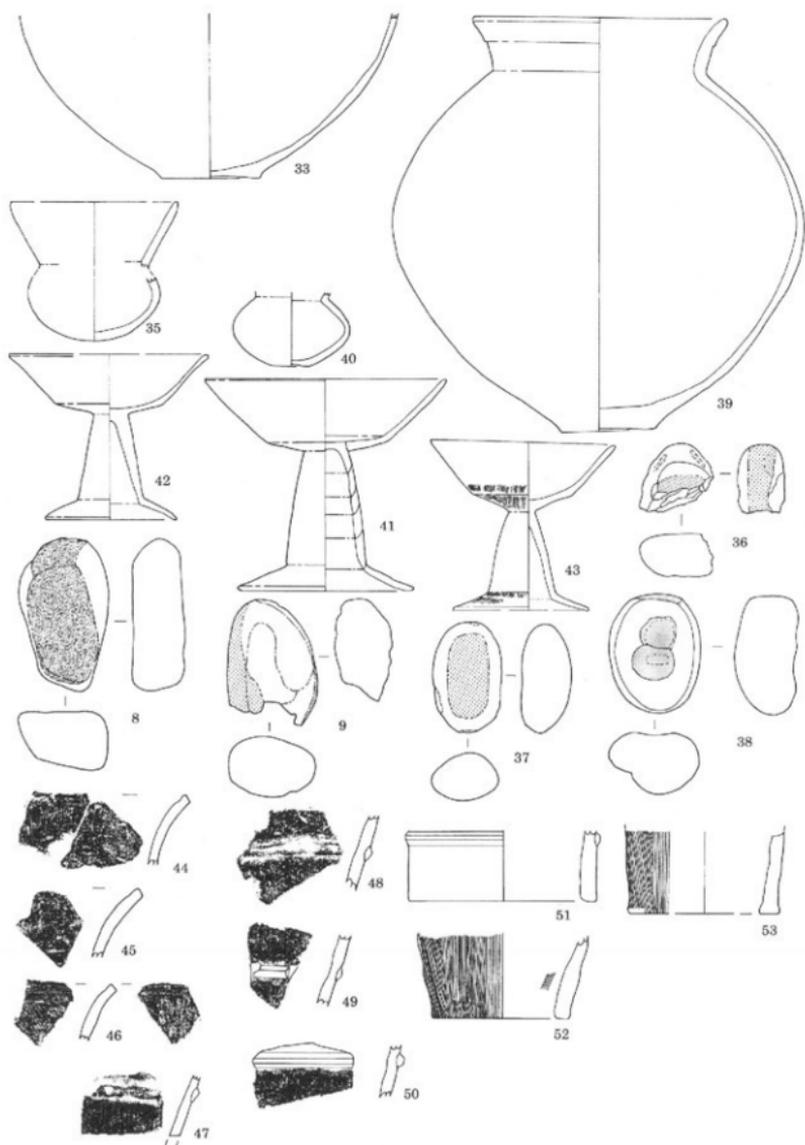
第13图 遗构实测图10 (第20·21号住居跡 SI-19·20)



第14图 1区溝实测图



第 15 圖 出土遺物 1 (No 2・6・18 ~ 1/2、1/4)



第16圖 出土遺物2 (1/4)

1. 遺跡遠景
(於下・伐採部分、大峰・山林部分)



2. 遺跡伐採後遠景



3. 同 近 景



図版II 遺構全景・塚土層



1. 2区(大峰遺跡)東側全景



4. 塚南東部土層



2. 2区(大峰遺跡)西側全景



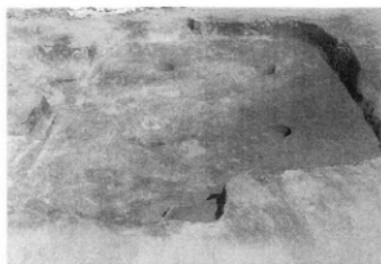
5. 塚北西部土層



3. 塚現況



6. 塚内雲母片岩出土状況



1



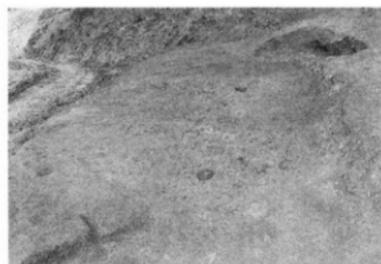
5



2



6



3



7



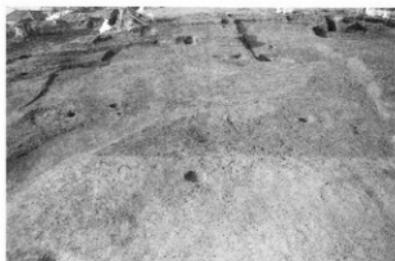
4

1 第1号住居跡 (SI-1) 全景	5 基壇状遺構 (SX-1) 全景 第4号溝 (SD-4) 全景
2 第2~4号住居跡 (SI-2~4) 全景 第1号溝 (SD-1) 北東部全景	6 第1号土坑 (SK-1) 全景
3 第5号住居跡 (SI-5) 全景	7 第2号土坑 (SK-2) 全景
4 第6号住居跡 (SI-6) 全景 第1号溝 (SD-1) 南側中央部全景	

図版IV 遺構 2 (2区遺構)



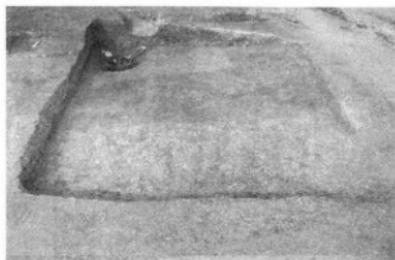
1. 第7号住居跡 (SI-7) 全景



5. 第12・13・15号住居跡 (SI-12・13・16) 全景



2. 第8・10号住居跡 (SI-8・SI-10) 全景



6. 第14号住居跡 (SI-14) 第1号溝 (SD-1) 北端



3. 第9号住居跡 (SI-9) 全景



7. 第16号住居跡 (SI-16) 全景



4. 第11号住居跡 (SI-11) 全景



4. 第17号住居跡 (SI-17) 炭化材・遺物出土状況全景



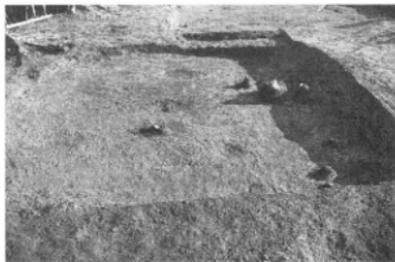
1. 第17号住居跡(SI-17)遺構全景



5. 2区第1号溝(SD-1)南側全景



2. 第18・19号住居跡(SI-17・19)遺構全景



6. 第9号住居跡(SI-9)遺物出土状況全景



3. 第20・21号住居跡(SI-20・21)遺構全景



7. 第11号住居跡(SI-11)遺物出土状況全景

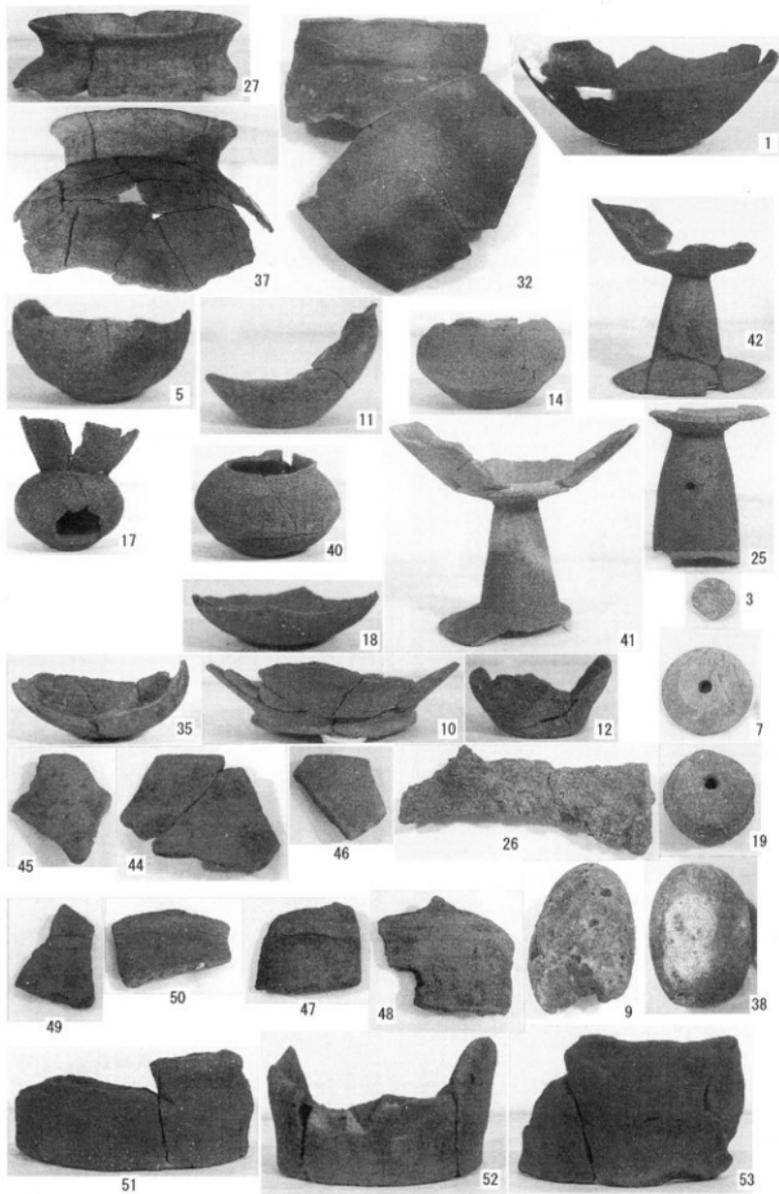


4. 第22号住居跡(SI-22)遺構全景



8. 第13号住居跡(SI-13)貯蔵穴内遺物出土状況全景

图版VI 出土遗物



茨城県行方郡麻生町
於下大峰遺跡調査報告書

発行年月日 平成 17 年 5 月
編 集 常総考古学研究所
発 行 麻生町教育委員会
印 刷 備 寺 門 印 刷